長野県産天然薬草採取の手引

長野県衛生部薬務課

はしがき

近年、漢方ブームにより薬草が見直されてその利用も年々増加の傾向にあります。

長野県では、昭和49年度生薬生産振興基本要綱を定め、この一事業として、天然薬草の採取の奨励をしているところでありますが、幸い本県は薬草の生育に適した自然環境にあり、天然薬草の種類も多く、しかもその品質が良いことは、全国的にも定評のあるところであります。

この貴重な薬草を有効に利用するため、ここに「天然薬草採取の手引」を作成いたしました。

本書は、昭和39年3月発刊されて以来好評を博し、再発刊の要望も強くありましたので、一部を改訂し、再発刊したものであります。

皆様方の薬草に関する知識の普及と採取の一助となれば幸いです。

昭和 50 年 3 月

長野県衛生部長

清　水　方　平

目　　次

薬用植物の処理方法（生薬の調製）……

（生薬名）

あおつづらふじ（かみえび）……木　防　己……3
あきからまつ（たかとうぐさ）……高　遠　草……3
あけび……モクツウ……4
あさがお……ケンゴ子……5
あし（よし）……蘆　根……5
あまどころ（からすゆり）……萎　蕤……6
あんず……キョウニン……7
いかりそう……淫　羊　藿……7
うけま……牛　皮　消　根……8
いたどり……虎　杖　根……8
いちい（あららぎ）……一　位　葉……9
いちじく……無　花　果……10
いちやくそう……鹿　蹄　草……10
いぬざんしょう……犬　山　椒……11
いのこずち……ゴシツ……12
いぶきじやこうそう……百　里　香……12
いぼたのき……いぼた蠟……13
うすばさいしん……サイシン……14
うつぼぐさ（なつがれそう）……カゴソウ……14
えんじゅ……カイカ……15
おうれん……オウレン……16
おおつづらふじ（つづらふじ）……カンボウイ……16
おおばこ（おんばこ）……シヤゼンシ……17
おきなぐさ（ほうこぐさ）……白　頭　翁……18
おけら（うけら）……オケラ……18

おとぎりそう……小　蓮　翹……19
おにのやがら（ぬすびとのあじ）……天　麻……20
おもと……万　年　青……20
かきどうし（かんとりそう）……連　銭　草……21
かきのき……柿　蒂……21
かや……榧　実……22
からすびしやく……ハ　ン　ゲ……22
からたち……枳　殼……23
かわほね（こうほね）……セ　ン　コ　ツ……24
かわらけつめい（きじまめはまちや）……山　扁　豆……24
かわらよもぎ……茵　陳　高……25
きからすうり……カ　ロ　コ　ン……26
きゝよう……キ　キ　ヨ　ウ……26
きささげ……キ　サ　サ　ゲ……27
ぎしぎし……羊　蹄……28
きむらたけ（おにく）……肉　蓯　蓉……28
きわだ……オ　ウ　バ　ク……29
くこ……枸　杞　子……29
くさぼけ（じなし）……和　木　瓜……30
くず……カ　ツ　コ　ン……31
くらら……ク　ジ　ン……31
くるみ（おにぐるみ）……胡　桃　仁……32
くろうめもどき……ソ　リ　シ……33
くろもじ……ウ　シ　ヨ　ウ……33
くわ……ソ　ウ　ハ　ク　ヒ……34
げんのしようこ……ゲンノシヨウコ……35
こけもも……コ　ケ　モ　モ……35
こぶし……辛　夷……36
さいかち……サ　イ　カ　チ……36

ざ　く　ろ……ザクロ皮……37
さじおもだか……タクシヤ……38
さるとりいばら……土茯苓……38
さんしゅゆ（やまぐみ）……山茱萸……39
さんしよう……サンショウ……39
し　お　ん……紫苑……40
ししうど……独活、羌活……41
しやくやく……シヤクヤク……41
しようま……42
　さらしなしようま……ショウマ……42
　とりあししようま……赤升麻……42
しようぶ……菖蒲……43
すいかずら……忍冬……44
すずらん（きみかげそう）……鈴蘭……44
せんきゆう……センキユウ……45
せんぶり……センブリ……46
だいこんそう……水楊梅……46
たらのき……楤木……47
たんぽぽ……蒲公英……48
ちようせんごみし……ゴミシ……48
つりがねにんじん（つりがねそう）……沙参……49
つるどくだみ……何首烏……49
てんなんしよう（あおまむしぐさ）……天南星……50
とうき……トウキ……51
とうもろこし……南蛮毛……52
とくさ……木賊……52
どくだみ……ジユウヤク……53
とちばにんじん……チクセツニンジン……54
とりかぶと……草烏頭……54

なぎなたこうじゅ……香　蘇……55
なつめ……タイソウ……56
なるこゆり……黄　精……56
なんてん……南　天　燭……57
にがき……ニガキ……58
にわとこ……接　骨　木……58
ぬるで……五　倍　子……59
のいばら……エイジツ……60
のだけ……前　胡……60
ばいけいそう……白藜芦根（東雲草）……61
はこべ（はこべら）……繁　縷……62
はしりどころ（さわなす、ゆきわりそう）ロート根……62
はつか……ハツカ……63
ひかげのかずら……石　松　子……64
ひがんばな……石　蒜……64
ひきおこし……延　命　草……65
ふき……フキ……66
ふくじゅそう……福　寿　草……66
ほうずき……酸　漿　根……67
ぼたん……ボタン皮……67
ほうのき……コウボク……68
またたび……木　天　蓼……69
まつほど（まつふと）……茯　苓……69
みしまさいこ……サイコ……70
むくろじ……延　命　皮……71
むらさき……紫　根……71
めはじき……益母草、充尉子……72
もも……白桃花、桃仁……73
やぶじらみ（のにんじん）……蛇　牀　子……73

やまごぼう……商　陸……74
やまとりかぶと……烏　頭……74
やまのいも（ながいも）……山　薬……75
ゆきのした（きじんそう）……虎　耳　草……76
よもぎ（もちぐさ）……艾　葉……76
りんどう（ささりんどう）……リンドウ……77
わた……綿実、草綿……78
われもこう（ぼうずばな）……地　楡……78

薬用植物の処理方法(生薬の調整)

薬用植物は収穫と同時に新鮮のまま製薬原料に供する場合は極めて少なく、大部分はこれを乾燥して貯蔵にたえる形に調整する。すなわち生薬に調製するわけである。調製の目的は、腐敗または変質を防ぐことによつて有効成分を減少せしめぬようにすることが主眼であるが、それと同時に外観をなるべく美しく調えることが必要である。なぜならば有効成分が簡単に定量できぬ生薬類は外観で価値を判断され、価格をきめられる傾向があるからである。

生薬の調製方法は大体次の3つの方法がある。

1　日乾法（陽乾法）

これはなるべく速やかに乾燥することを目的とする。例えば配糖体を含むものは長時間たつと成分が分解するおそれがあるため、速やかに乾燥する必要がある。

日乾は筵などの上にひろげて直接日光にあてる方法であるが、筵を土の上におかず30cm～50cmぐらいの高さの台をこしらえ、この上に横木数本を渡してその上に筵をひろげて干せば日光と同時に風乾作用も手伝うし、土の湿気をも受けずにすむ。なるべく乾燥時間が少なくてすむように工夫することが肝要である。

2　陰　乾　法

これは風通しの良い室内か日陰を利用して行う方法で、揮発油類を含むものの如き急速に乾燥すると水分の蒸発に伴つて、揮発成分まで失うおそれのあるもの等を処理する方法である。大体網にくんで風通しのよい所に吊して乾燥する。もちろん棚をつくつて行つてもよい。

3　火力乾燥法

これは概して大量の薬草を短時日の中に処理する場合に行われるもので、天候に支配されないが、装置費用がかかるのが欠点である。方法は箱式、熔焦式、真空式等いろいろあるが、概して60～70°cで通風を良くして行う。なお澱粉を含むものは、蒸すかあるいは湯通しをして行うことがある。蒸乾には「せいろ」で10～30分間蒸し、湯通しは40～50°cで20分間、又は約80°cで数分間湯中に浸して後乾燥する方法である。こうすることによつて澱粉を糊化し、質を緻密にするから、乾燥も短縮できるし、生薬の保存上からも害虫や腐敗を防げるのである。

また乾燥に先立つて石灰粉をまぶす方法がある。例えば「からすびしやく」「やまのいも」のような肉厚で水分の多い根茎類は、石灰の脱水力で乾燥が早まるし、出来あがりも美しくなる。

一般に薬草の乾燥程度は、葉は手でもむと砕けるくらい、根は折れ易くなるくらいとし、充分乾燥されたものについてはその水分含量は、皮は10%、根（根茎）15%、果実20%、葉8%ぐらいである。なお採取した薬草よりの乾燥歩留は、葉20%、根（根茎）25%、皮30%ぐらいである。

あおつづらふじ

〔別名〕かみえび

【科　名】つづらふじ科

【生薬名】木防己

【薬用部】根及び根茎

【形　態】各地の山野に自生する落葉蔓性藤本で、全株に短毛がある。葉は浅く3裂する心臓形又は長心臓形で葉面に光沢がない。花は単性で雌雄異株、濃緑色の小花で夏聚散花序に開く。果実は球形の核果で黒熟する。

【産　地】松筑地方　南安曇郡

【採取時期及び処理】秋から冬にかけ落葉後根を堀りとり、水洗して5mm位の厚さに輪切りとし、日乾する。乾燥歩留は4割である。

【成　分】アルカロイド（トリロビン、ホモトリロビンその他）

【効　用】利尿、鎮痛（神経痛、リウマチス）解熱に1日約4gを煎用する。

【備　考】牧野日本植物図鑑によれば本邦においては、かみえびをあおつづらふじと誤称していると記載されている。

あきからまつ

〔別名〕そう、たかとうぐさ、あきのからまつ

【科　名】きんぽうげ科

【生薬名】高遠草

【薬用部】全　草

【形　態】各地の山野に自生する多年草で、高さ1m内外である。葉は再三羽状複葉で小葉は円形又は楕円形を呈し、苦味を有する。花は初秋の頃淡黄白色の小花を多数円錐花序に開く。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】7～8月頃茎を刈りとり日乾する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】アルロイド、（ベルベリン、マグノフロリン、エラトリン等）

【効　用】健胃薬、下痢止めとして1日約5gを煎用する。打身打撲痛に消炎剤として用いる。

【備　考】本県下で薬用にする

【科　名】あけび科

【生薬名】モクツウ（木通）〔局方2部〕

【薬用部】茎

あけび

【形　態】山野に自生する落葉蔓性灌木である。葉は5枚の掌状複葉で、小葉は全線長楕円形である。花は晩春紫色の小花を総状に開く。果実は楕円形の漿果で秋熟して縦裂する。

果実は食用とされる。小葉3出するものを「みつばあけび」と称し共に薬用される。

【産　地】県下各地、南佐久郡、埴科郡

【採取時期及び処理】秋、落葉の頃茎を刈りとり、小刀で外皮をはぎ薄く輪切りとして莚に拡げて日乾する。乾燥歩留は4割である。

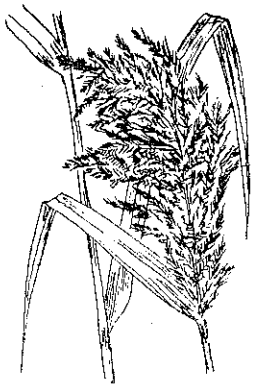
【成　分】配糖体（アケビン）カリウム塩類

【効　用】消炎、利尿、通経、排膿薬として1日約5gを煎用する。

あさがお

【科　名】ひるがお科
【生薬名】ケンゴ子（牽牛子）
〔局方2部〕
【薬用部】種　子
【形　態】観賞用植物として各地に栽培される1年生蔓草で、葉は有柄3深裂し、葉面に微毛がある。花は種々の色があり、夏ロート状の合弁花を開く。果実は球形の蒴果で3室よりなり1室に2個づつの種子がある。
【産　地】県下各地（栽培）
【採取時期及び処理】種子の大部分が成熟した頃蔓を刈取り、4～5日陽乾し、竿で打ち種子を落す。之を葉茎と風選し又は篩い分け、更に乾燥して黒種子と白種子に区分する。
【成　分】樹脂配糖体（ファルビチン）及び脂肪油
【効　用】瀉下剤として0.5～0.7gを粉末として用いる。
【備　考】白牽牛子と黒牽牛子とは薬効に大差はない。

あし〔別名〕よし



【科　名】いね科
【生薬名】蘆根
【薬用部】根　茎
【形　態】各地の水辺に自生する宿根草で高さ1～3m、地下茎は横走し、葉は線状披針形で概形「すすき」に似て大きい。
花は多数の白色小花で、秋小枝を有

する花梗を出して円錐花序に開く。

【産　地】県下各地　特に北佐久郡、上水内郡北部

【採取時期及び処理】秋冬の頃に根茎を掘りとり、水洗後鬚根を除き切断して日乾する。凍らせぬように注意し、白色に仕上げることが必要である。乾燥歩留は3割である。

【成　分】有効成分未詳

【効　用】消炎、利尿薬1日5～10g煎用する。

あまどころ

〔別名〕からすゆり、いずい

【科　名】りゆ科

【生薬名】萎蕤（いずい）

【薬用部】根　茎

【形　態】各地の山野に自生する多年草で茎に稜があり葉は互生し卵形又は長楕円形である。初夏に葉腋より2～3の緑白色花を垂下する。地下には円柱状の根茎を有する。

【産　地】県下各地　特に下高井郡、松本

【採取時期及び処理】冬期葉の枯れた頃根茎を掘りとり、水洗後鬚根を取り日乾する。冬期乾燥時に凍らせぬよう特に注意を要する。乾燥歩留は3割である。

【成　分】粘液質及び糖類（果糖を主としその他ブドウ糖、アラビノーゼ）

【効　用】強壮剤として1日5～10gを煎用する。民間においては生の根茎を摺り下し、又は煎汁を打撲症に用いる。

【科　名】ばら科

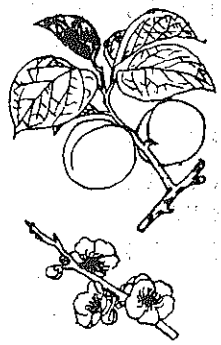
【生薬名】キョウニン（杏仁）
〔局方２部〕

【薬用部】種子中の仁

【産　地】北信地方　特に長野市大字安茂里、更埴市森、更埴市倉科

【採取時期及び処理】　食用にしたあんずの杏核（種子）を割り、中の仁を取り出して日乾する。

あんず



【成　分】配糖体（アミグダリン）脂肪油

【効　用】鎮咳、痰薬として１日３～６gを煎用する。又キョウ油（局方）キョウニン水（局方）の製造に用いる。

【科　名】めぎ科

【生薬名】淫羊藿（いんようかく）

【薬用部】茎　葉

【形　態】山野に自生する多年草で茎は叢生し、高さ30cm内外である。葉は卵形の補葉で、縁に刺がある。花は淡紫色又は白色の４弁花で初夏に葉にさきがけて開き、花冠は碇状をしている。

いかりそう

【産　地】上下高井郡、北安曇郡、上下水内郡

【採取時期及び処理】５月頃より夏にかけて開花の全草を根本より刈り取り、風通しのよい日陰に吊して乾燥する。乾燥歩留は２割である。

【成　分】配糖体（イカリイン）アルカロイドを含有するともいわれる。

【効　用】強壮、強精薬として1日8gを煎用する。又酒で冷浸して飲用する。

【科　名】ががいも科

【生薬名】牛皮消(ごひしょう)根

【薬用部】根

いけま

【形　態】山地に自生する多年性蔓草で、葉は対生長柄で長心臓形である花は白色の小花で、夏葉腋に1cm位の細い茎を出し、繖形花序に開く。果実は細長い蒴果で熟せば破れて白毛を有する種子を飛ばす。

【産　地県下各地】　特に上高井郡、東筑摩郡

【採取時期及び処理】秋彼岸後茎葉の枯れる頃根を掘り取り、茎を除いて水洗後横切りにし、大きいものは縦に割り充分日乾する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】苦味成分（シナンコトキシン）

【効　用】利尿薬として脚気、水腫等に1日約4gを用いる。

【科　名】たで科

【生薬名】虎杖(こじょう)根

【薬用部】根

いたどり

【形　態】山野、路傍に自生する多年草で、茎は中空である。外皮は赤い班点があり、葉は有柄互生し、卵形で先端が尖つている。花は

白色又は淡紅色の小花で、夏秋に葉腋に開く。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】晩秋葉の枯れる頃、根を掘りとり、水洗後毛根は除き日乾する。乾燥歩留は3割5分である。

【成　分】オサシアントラキノン配糖体（ポリゴニン）

【効　用】利尿、緩下、通経薬として1日約10gを用いる。民間においては咳に用いる。

いちい

〔別名〕あらぎ、おんこ

【科　名】いちい科

【生薬名】一位葉

【薬用部】葉

【形　態】山地に自生又は栽植される常緑喬木である。葉は狭線形で上面は濃緑色である。春、単性花を開き、果実は球形で紅く熟す。葉は特異の芳香を有する。

【産　地】県下各地　小県郡、上水内郡

【採取時期及び処理】葉を採取し、日乾する。乾燥歩留は2割である。

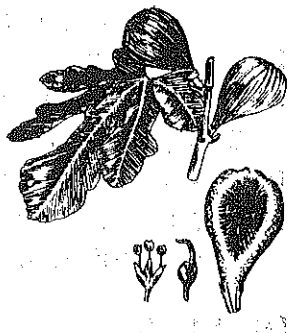
【成　分】アルカロイド（タキシン、タキシニン）フラボノイド（スシアドピイチシン）

【効　用】葉を煎じ、通経及び利尿薬とする。

【科　名】くわ科

【生薬名】無花果（むかか）

【薬用部】果　実



【形　態】果樹として栽培され、高さ3mぐらいである。葉は大形で3～5に分裂する掌状又は全葉で互生する。花は淡紅白色の小花で、初夏より秋にかけて総花托の内側にかくれて多数開花する。果肉は円形多肉で食用となる。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】9月頃成熟した果実をとり乾燥する。乾燥歩留は1割である。

【成　分】糖類（転化糖）有機酸類（クエン酸、リンゴ酸、酢酸）酵素（ペプトン化酵素）

【効　用】痔、咽喉痛、緩和滋養薬、緩下薬として1日3～5gを煎服又は含嗽する。

【科　名】いちやくそう科

【生薬名】鹿蹄草（ろくていそう）

【薬用部】全　草

【形　態】山中の湿地に自生する多年生常緑草本である。葉は革質で根生葉を簇生し、広卵形で表面は深緑色、裏面はやや紅色である。花は黄白色5弁花で5～6月頃葉間より花茎を出して小花を開く。果実は

扁球形の蒴果を結ぶ。

【産　地】八ケ岳、浅間山、その他の山地帯

【採取時期及び処理】6月頃の花期に全草を刈りとり日乾する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】ケルセチン配糖体（ピロラチン）

【効　用】外用に生薬の汁液を止血、収斂薬として用い、内用には煎じて脚気に利尿薬として用いる。

いぬざんしょう

【科　名】みかん科

【生薬名】犬山椒

【薬用部】果実及び葉

【形　態】河畔、原野等に自生する落葉灌木で、山椒に似ているが、枝の刺は互生し、芳香なく一種の悪臭がある。葉は7～9対の奇数羽状複葉で小葉は披針形で細長い。花は緑黄色の小花で、夏、茎頂に傘状に簇生する。果実は球形の小蒴果を結ぶ。

【産　地】県下各地　特に南佐久郡、北佐久郡

【採取時期及び処理】秋期果実及び葉を採取し、日乾する。葉の乾燥歩留は3割5分である。

【成　分】精油、（メチルシヤビコール、エスドラゴール、ベルガプテン）

【効　用】果実及び葉は打撲症、リウマチ、乳房の腫脹等に粉末として飴で練り塗布する。果実は鎮咳薬としても煎服される。

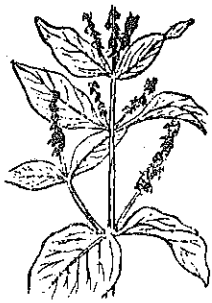
【科　名】ひゆ科

【生薬名】ゴシツ（牛膝）〔局方2部〕

【薬用部】根

【形　態】各地に野生する多年草で茎は方形、1m内外となる。葉は対生、楕円形で、花は緑色、夏茎頂及び葉腋に穂状花を開く。果実は楕円形の小果で刺があり、衣服等に附き散布する。

いのこずち



【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】11月頃根をいためぬ様に注意して掘りとりそのまま吊して乾燥する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】一種のサポニン、多量の粘液及び無機物（カリ塩）

【効　用】通経薬として1日約8gを用いる。

【科　名】しそ科

【生薬名】百里香（ひゃくりこう）

【薬用部】全　草

【形　態】各地の山野に自生する多年生の草状小灌木で、茎は地上を匍匐し、多数分枝に紫色を帯びている。葉は対生し小形長楕形である。花は白色又は淡紅紫色で、初秋に小唇形花を開く。果実は瘦果を結ぶ。全草に芳香がある。

いぶきじやこうそう

【産　地】南、中北信の山地―高山帯

【採取時期及び処理】夏期全草を採取し、日乾する。乾燥歩留は

2割である。

【成　分】精油（チモール、カルバクロール）

【効　用】防腐、発汗、駆風薬とし、生葉は芳香を有するため、香味料として料理に用いる。

いぼたのき

【科　名】もくせい科

【生薬名】いぼた臘（伊保多臘）

【薬用部】昆虫（いぼたろうむし）の寄生により樹皮上に生ずる蠟様分泌物

【形　態】各地に野生する落葉灌木で高さ2m内外である。葉は対生短柄あり長楕円形である。花は5～6月頃白色の小花を開く。果実は黒色の漿果である。

【産　地】県下一円

【採取時期及び処理】イボタカイガラムシの雄虫が本植物に群生して分泌する蠟を秋期成虫が飛び立つた後採集する。

【成　分】蠟（セロチン酸、イボタセロチン酸のセリルアルコール及びイボタセリルアルコールエステル）

【効　用】利尿薬として水腫病に用いられる。民間では、強壮薬、止血薬として用いる。家具の艶出等工業上大量に消費する。

うすばさいしん

【科　名】うまのすずくさ科

【生薬名】サイシン（細辛）〔局方2部〕

【薬用部】根及び全草

【形　態】山陰地、樹下に自生する多年草で、葉は根より出、薄く、淡緑色心臓形である。花は紫黒色の壺状花で春期葉の間より花梗を出して1個開く。

【産　地】松筑地方

【採取時期及び処理】7～9月頃根をいためぬように掘りとり水洗して土砂を除く。これを1夜放置して水を切り、莚に拡げて日乾する。乾燥程度は根の太い部分を曲げて折れる程度にする。乾燥歩留は根が2割5分、全草は1割5分である。

【成　分】精油（メチルオイゲノール、サフロール）約3％の他アサリニン

【効　用】発汗、利尿、痰、鎮静、鎮痛薬として1日3g用いられる。

うつぼぐさ〔別名〕なつがれそう

【科　名】しそ科

【生薬名】カゴソウ（夏枯草）〔局方2部〕

【薬用部】花穂又は全草

【形　態】山野、路傍に自生する多年草で、高さ30cm位、全株に細毛がある。葉は有柄で対生し、楕円形又は披針形である。花は短大な紫色の穂状花序で、初夏に茎頂に開く。

花穂は後褐変する。

【産　地】県下各地　特に東筑摩郡、南佐久郡

【採取時期及び処理】夏―秋、花穂の暗褐色に変つた頃花穂のみを刈りとり、風通しのよい日陰に吊し乾燥する。全草を採取乾燥してもよい。乾燥歩留は花穂2割である。

【成　分】無機物（塩化カリ）及びアルカロイド様物質

【効　用】利尿剤として淋疾に用いられ、又瘰癧の要薬として古くから用いられる。1日5―10gを煎剤として用いる。

えんじゅ

〔別名〕いぬえんじゅ

【科　名】まめ科

【生薬名】カイカ（槐花）〔局方2部〕

【薬用部】花蕾、果実

【形　態】高さ6～10mに達する落葉喬木である。葉は奇数羽状複葉で小葉は5～7対あり、卵状披鉢形で先端尖り白粉を帯びている。花は淡黄白色の蝶形花で初夏茎頂に複総状花序に開く。果実は連珠状の莢果である。

【産　地】県下各地　特に下高井郡、小県郡、南佐久郡

【採取時期及び処理】初夏に未開の花蕾を採取し、乾燥する。果実を採取乾燥してもよい。果実の乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】配糖体（ルチン）

【効　用】喀血、腸出血、膀胱出血等の止血薬として1日約10gを煎用する。又ルチンの製造原料で血圧降下剤として用いられる。

おうれん

【科　名】きんぽうげ科
【生薬名】オウレン（黄連）〔局方1部〕
【薬用部】根　茎
【形　態】山地の樹陰に自生、又は栽培される常緑多年草である。根茎は黄色を呈してやや肥厚し、結節多く鬚根を生ずる。葉は叢生し、長柄3出複葉で、小葉は卵形で鋸歯がある。早春に白色の小花を開く。雌雄異株、果実は蓇葖である。品種はきくばおうれんが主として用いられ、せりばおうれんも次いで使用される。
【産　地】戸隠、八ケ岳、西筑摩郡、北安曇郡の山岳地帯
【採取時期及び処理】初冬に根茎を掘りとり、茎部及び鬚根を除き莚に拡げて日乾する。乾燥歩留は3割である。
【成　分】アルカロイド（ベルベリン、パルマチン、オーレニン、コプチジン）
【効　用】苦味健胃薬として散剤、エキス、煎剤、丸剤として用いられ、胃腸カタル、コレラ、赤痢、腸結核に約10gを煎用する。民間では煎剤として洗眼料に用いる。

おおつづらふじ
〔別名〕つづらふじ

【科　名】つづらふじ科
【生薬名】カンボウイ（漢防己）〔局方2部〕
【薬用部】根又は根茎
【形　態】暖地の山野に自生する落葉藤本で全株無毛である。葉は互生長柄を有し、広卵形或いは多角形で3～5裂し、葉面に

光沢がある。花は淡緑色の小花で、夏、葉腋より花茎を出して開く。果実は球形の核果で黒熟する。

【産　地】松筑地方

【採取時期及び処理】秋9～10月頃根を掘りとり、充分水洗した後5cmくらいの厚さに輪切りとし、莚にひろげて日乾する。

【成　分】アルカロイド（シノメニン、ジシノメニン）

【効　用】神経痛の利尿、鎮痛薬として1日5～8g煎用する。

おおばこ

〔別名〕おんばこ　げいろつぼ

【科　名】おおばこ科

【生薬名】シヤゼンシ（車前子）〔局方2部〕

【薬用部】全草、種子

【形　態】山野、路傍到るところに自生する多年草である

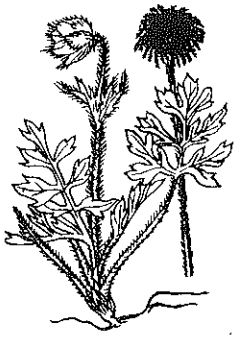
【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】夏期7～8月頃帯花の全草を採取し、水洗後風通しのよい日陰で乾燥する。全草の乾燥歩留は1割5分である。車前子は秋期種子の完熟したものを果穂のまま刈りとり、2～3日積み置いて莚にひろげて日乾する。乾燥したものを軽く搗き、篩にかけ、風選し種子のみを取る。これを更に日乾する。

【成　分】配糖体（アウクビン、プランダギン）を含み、種子は粘液、コハク酸、プランテノール酸、アデニン、コリン等を含む。

【効　用】全草は利尿薬として1日約15gを煎用する。種子は利尿薬として淋疾に用い、又鎮咳祛痰薬として1日5～8gを煎用する。

おきなぐさ（有毒）



【科　名】きんぽうげ科
【生薬名】白頭翁（はくとうおう）
【薬用部】根
【形　態】山野に自生する多年草で高さ30cm位、全株に白毛がある。葉は根より出て2回羽状に深裂し、裂片は線状である。春、暗紫色6弁の美花を開く。
【産　地】県下各地
【採取時期及び処理】7～8月頃長さ15～20cmの紐状に分枝している根を掘りとり、水洗後日乾する。乾燥歩留は2割である。
【成　分】未詳
【効　用】通経、熱性下痢に効あり、1日約8gを煎用する。消炎、収斂止血薬

おけら（別名）うけら

【科　名】きく科
【生薬名】オケラ（蒼求）（白求）〔局方2部〕
【薬用部】根　茎
【形　態】山野に自生する多年草で高さ、60～100cm、葉は有柄互生し卵状楕円形である。秋期白色（稀に紅色）の筒状花を開く。総苞は特異にして魚骨状を呈する。
【産　地】県下各地　特に上伊那郡、北安曇郡、上下高井郡、南

佐久郡

【採取時期及び処理】秋から冬にかけて根茎を掘りとり、水洗後鬚根を去り、日光で良く乾燥する。皮部を剝ぎ乾燥したものを白求という。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】多量の精油（アトラクチロン）を含む

【効　用】芳香健胃薬又は発汗解熱薬として 1日3～5gを煎用する。室内で燻蒸すれば除湿の効を有し、黴を防ぐに用いられる。屠蘇散の原料として重要

【科　名】おとぎりそう科

【生薬名】小蓮翹（弟切草）

【薬用部】全　草

【形　態】山野に自生する多年草で高さ 60～70cm、葉は対生無柄、長卵円形で葉面には黒色の斑点がある。花は黄色の5弁花で花弁にも油線の黒点がある。開花は夏～秋である。

おとぎりそう

【産　地】西筑摩郡、東筑摩郡、南佐久郡

【採取時期及び処理】開花の頃（夏秋）全草を刈り取り、日陰で風乾する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】タンニン、ヒペリシン

【効　用】止血薬、切傷、打撲傷に塗布し、又神経痛、リウマチに1日約5gを煎用する。

【科　名】らん科

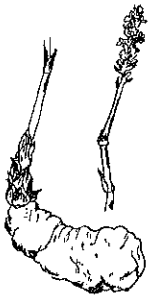
【生薬名】天麻（てんま）

【薬用部】根　茎

【形　態】山野の樹陰地に自生する寄生性多年草で、根茎は肥厚し長楕円形である。高さ1m位茎は多肉で赤黄色である。葉は薄膜質の鱗葉で葉緑を欠く。花は黄色の小花で4、5月頃茎頂に開く。

おにのやがら

〔別名〕ぬすびとのあし



【産　地】諏訪郡、上伊那郡

【採取時期及び処理】秋期、根茎が充分成熟し開裂した頃掘りとり、水洗して充分日乾する。乾燥歩留は3割である。

【成　分】未詳

【効　用】鎮痙、強壮薬とし、めまい、頭痛、神経衰弱に1日3～5gを細切し、川芎を配伍して煎服する。

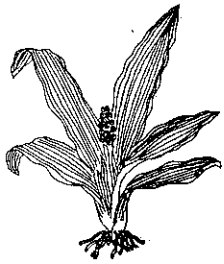
【科　名】ゆり科

【生薬名】万年青（まんねんせい）

【薬用部】根

【形　態】暖地の山地に自生し、観賞用として栽培もされている常緑の多年草である。葉は根より出て長さ30cm位の長披針形である。春、淡緑白色の小花を穂状に開く。

おもと



【産　地】県下各地　（栽培）

【採取時期及び処理】年間を通じ採取可能である。掘りとつた根茎を水洗し、適当の大きさに切つて日乾する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】配糖体（ロデイン）

【効　用】強心薬、利尿薬としてヂギタリスに代用される。1日3～5g煎じて用いる。

【科　名】しそ科

【生薬名】連銭草（れんせん）

【薬用部】帯花の全草

【形　態】原野、路傍に自生する多年草で、茎は方形匍匐性である。葉は有柄対生、円形で鈍鋸歯縁である、3～4月頃淡紫色の花を開く。花終れば　茎は地上に臥して蔓となる。葉茎共に一種の香気を有する。

かきどおし（別名）かんとりそう

【産　地】県下各地　特に下高井郡、諏訪郡、松本

【採取時期及び処理】春4月頃帯花の全草を根元より刈り取り、風通しの良い日陰に吊して乾燥する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】コリン、タンニン、精油、苦味質等を含む。

【効　用】強壮、解毒、小児の疳に用いる。又喀血にも用いられ、1日約10gを煎用として服用する。

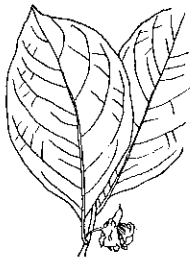
【科　名】かきのき科

【生薬名】柿蔕（してい）

【薬用部】かきのへた（果実の萼片）

【形　態】山中に自生又は果樹として栽培される落葉喬木である。

かきのき



【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】秋期「かきの

へた」を採取し乾燥する。乾燥歩留は4割である。

【成　分】有機酸、糖類

【効　用】吃逆（シヤツクリ）止めの効あり1日約8gを煎用する。民間では高血圧の薬として煎用する。

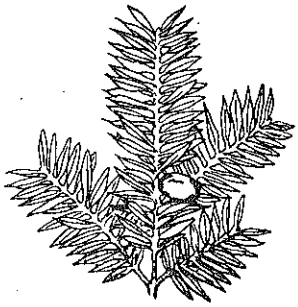
かや

【科　名】いろい科

【生薬名】榧実（ひじつ）

【薬用部】種　子

【形　態】山地に自生する常緑喬木で、葉は短柄、線状披針形、質剛強で革質である。雌雄異株で春開花する。果実は核果状で種子が裸出し外種皮は肉質で緑色から紫赤色に熟する。



【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】秋成熟して落果したものを集めて外種皮を除き、更に水洗しムシロに拡げて日乾する。

【成　分】脂肪油、精油（リモーネン）

【効　用】駆虫薬とし十二指腸虫駆除に用いる。

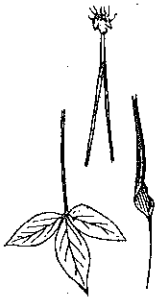
からすびしゃく

【科　名】さといも科

【生薬名】ハンゲ〔局方2部〕

【薬用部】根（球茎）

【形　態】原野、畑地に雑草として自生する多年草で、地中の球茎から1～3本の茎を出し、茎の頂に長い葉柄のある複葉をつける。小葉は3枚で卵状針形である。花は夏、球茎から長い花茎を出し仏燄という特長ある花を



つける。

【産　地】県下各地　特に上下水内郡、西筑摩郡

【採取時期及び処理】6月麦刈後から7月にかけて根茎を掘りとり、水洗し、樽の中に入れて食塩水（水18ℓ（1斗）に食塩300g（2合）の割合）を加え、又は水中に3日間ぐらい浸しておき、芋洗いの様に棒でかき廻す。これにより表皮は容易にはげる。表皮を除いた後に、清水で数回水洗し、清水中に1昼夜浸して苦味を除く。この水を切つて莚に拡げ、風通しの良いところで日乾する。仕上は白色に仕上げたものを良品とする。乾燥歩留は3割である。

【成　分】精油及び無機塩類（カルシウム、マグネシウム）を含む。

【効　用】鎮吐剤として特に悪阻に用いる。鎮嘔剤として1回2～3g1日5～10gを煎用するか、或いは粉末として用いる。本品は生姜と併用する。

からたち

【科　名】みかん科

【生薬名】枳殼（きこく）

【薬用部】果実、未熟の果実

【形　態】広く栽植される落葉灌木で、枝に多数の鋭い刺がある。葉は有柄3出複葉で、小葉は卵形鋸歯縁である。花は白色で葉の出る前に開く。果実は球形の漿果で熟せば黄色に変る。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】夏秋未熟の果実を採取し、わぎりにし、日光で充分乾燥する。

【成　分】ポンシリン

【効　用】芳香性健胃薬、駆風薬とし、又止瀉の効あり、1日約10gを煎用する。

かわほね

〔別名〕こうほね

【科　名】すいれん科

【生薬名】センコツ（川骨）〔局方2部〕

【薬用部】根　茎

【形　態】河川、沼沢等浅水中に自生する多年草で、葉は長柄を有し10～20cmの長楕円形をなし水上のものは厚く、色は深緑色水中のものは薄く黄緑色を呈す。7～8月頃太い花梗を水面上に出し、黄色の5弁花を開く。

【産　地】諏訪郡、東筑摩郡、上水内郡

【採取時期及び処理】10～11月根茎を傷めぬよう掘りとり、水洗してひげ根、茎葉を去り、2つに割つて30m内外の長さに切り、日乾する。乾燥はなるべく早く仕上げ、横切面が粉状となる頃が適当である。乾燥歩留は1割である。

【成　分】アルカロイド（ヌファリジン）

【効　用】強壮薬又は止血薬として産前、産後切創に用いる。1日用量5～10g煎用する。

かわらけつめい

〔別名〕きじまめはまちや

【科　名】まめ科

【生薬名】山扁豆（さんへんつ）

【薬用部】全　草

【形　態】河原、砂地に自生する1年草で、高さ60cm内外、全株に小毛を有する。

葉は羽状複葉で、小葉は長楕円形である。花は白黄色の5弁花で夏日葉腋に開く。

【産　地】県下各地　特に東筑摩郡

【採取時期及び処理】夏～秋、開花の時を見て全草を根元より刈り取り、日陰に吊して風乾する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】未　詳

【効　用】利尿薬として脚気腎臓炎等に用いられ健胃薬として消化不良に1日約20gをほうじ煎用する。茶の代用としても用いられる。

かわらよもぎ

【科　名】きく科

【生薬名】茵陳蒿（いんちんこう）

【薬用部】果　穂

【形　態】原野、河原等の砂地に自生する多年草で、高さ1m内外、茎は多数分岐する。根生葉は再羽状分裂し、裂片は線状をなす。白毛あり。茎葉は糸状口細裂し葉柄を欠く。花は緑色の小頭状花で、夏、茎頂に開く。

【産　地】県下各地　松筑地方

【採取時期及び処理】夏の終りから秋にかけて果実の稔熟し脱落せぬうちに果穂のみをとり、莚にひろげ日乾する。又は風通しの良い所に吊し陰乾する。通常晴天1週間程要する。乾燥歩留は2～2.5割である。

【成　分】精油（ベータピネン、カピロン等）

【効　用】利尿、利胆として黄疸に1日約15gを煎用する。

きからすうり

【科　名】うり（瓜）科
【生薬名】カロコン（括楼根）〔局方2部〕
【薬用部】根及び種子
【形　態】原野に自生する多年生蔓草で、概形「からすうり」に似ている。茎葉は無毛で、葉は半円形、巻鬚は分岐し、夏、花冠5裂の白色花を開く。果実は広楕円形で熟せば黄色に変る。
【産　地】県下各地
【採取時期及び処理】秋末、完熟した種子をとり、積み重ねて果肉を腐敗させ、砕いて日乾し、風選して種子のみとし、更に種皮を除き、仁を取る。根は果実の採取後堀りとり、水洗後抱層を剝離し、手早く日乾する。乾燥歩留は2割である。
【成　分】種子は脂肪油、根は多量の澱粉を含む。
【効　用】種子は鎮静、鎮咳薬として効あり。根は利尿催乳の効あり、1日約8gを煎用する。根より製した澱粉は、天花粉と言い、湿疹その他皮膚病に撒布薬として用いられる。

ききょう

【科　名】ききょう科
【生薬名】キキョウ（桔梗根）〔局方2部〕
【薬用部】根
【形　態】山野に自生する多年草で、栽培もされる。茎の高さ30cm～60cm葉は互生、有柄、披針形又は長楕円形で、鋸歯がある。花は紫色又

は白色で夏秋に5裂の鐘状花を開く。

【産　地】県下各地　特に小県郡、東筑摩郡

【採取時期及び処理】秋期、根を掘りとり、水洗して日乾する。晒桔梗は、根皮を剝ぎとり乾燥したものである。乾燥歩留は2割である。

【成　分】配糖体（キキョウサポニン、フイステロール）多糖類（イヌリン）

【効　用】祛痰薬、排膿薬として1日6gを煎用する。

【科　名】のうぜんかずら科

【生薬名】キササゲ（きささげ実）〔局方2部〕

【薬用部】果　実

【形　態】各地に栽培される落葉喬木で、葉は長柄、広心臓形、鋭尖頭で3裂する。花は内面に斑紋ある淡黄色鐘状花で、初夏に枝の頂上に開く。果実は30cm内外の狭長線状果で、蒴果を房状につける。

きささげ

【産　地】県下各地　特に南安曇郡、上高井郡、上伊那郡、小県郡

【採取時期及び処理】9月頃、果実の稔熟したものを莢が弾く前にとり、日乾する。乾燥歩留は5割である。

【成　分】有機酸（クエン酸、パラオキシ安息香酸）無機塩類（カリウム塩）

【効　用】利尿薬として約8gを煎用する。

【科　名】たで科
【生薬名】羊蹄（ようてい）
【薬用部】根
【形　態】原野、路傍の湿地に自生する多年草で概形「すいば」に似ている。茎葉は大きく、葉は長柄、長楕円状披針形で、鈍頭鋭脚である。

（別名）うまずいこ
ぎしぎし

【産　地】県下各地　下高井郡、下水内郡、小県、諏訪、東筑摩
【採取時期及び処理】初秋、新鮮な根を掘りとり日乾する。乾燥歩留は2割である。
【成　分】アントラキノン配糖体（クリソファン酸、フラングラエモジン等）
【効　用】瀉下薬として1日約5gを煎用する。又新根を搗き、皮膚病に塗布する。

【科　名】はまうつぼ科
【生薬名】肉蓯蓉（にくじゅうよう）
【薬用部】全　草
【形　態】「みやまはんのき」の根に寄生する多年草で、地下に塊状の根茎があり、茎は肉質円柱状30cm内外の高さである。葉は鱗状で、茎全体を瓦様におゝい黄褐色を呈する。花は紫褐色の筒状唇形花で夏期開く。

（別名）おにく
きむらたけ

【産　地】県下各地の高山帯樹陰地
【採取時期及び処理】7～8月頃、開花した全草を採取し、水洗

後乾燥する。

【成　分】未　詳

【効　用】強壮強精薬として1日約6gを煎用する。

【科　名】みかん科

【生薬名】オウバク（黄柏）〔局方1部〕

【薬用部】樹皮（枹層を除去する）

【形　態】山地に自生する喬木で高さ10mぐらいに達する。葉は対生、表面緑色、裏面帯白色である。雌雄異株、花は黄緑色の小花で夏枝頂に着生する。果実は球形黒色大豆大の核果である。

きわだ

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】梅雨期前後より土用にかけ、樹液の流動最も盛んな頃、樹を伐り、皮を剝ぎ足で踏むと上皮が剝げるので、これを去り、日乾する。乾燥歩留は4割である。

【成　分】アルカロイド（ベルベリン、パルマチン）オーバクノン、オーバクラクトン

【効　用】苦味健胃、殺菌整腸薬として1日3gを粉末とし服用又は煎用する。煎汁は又血膜炎等の充血の洗眼に用いる。

【科　名】なす科

【生薬名】枸杞子（くこし）、枸杞葉（くこよう）、地骨皮（じこつひ）

【薬用部】果実、葉、根皮

【形　態】原野、路傍に自生する落葉小灌木で小枝はしばしば刺に変化する。葉は柔軟、有柄、披針形または倒卵形で鋭頭である。夏頃淡紫色の5浅裂、鐘状花を腋出する。漿果

くこ

は楕円形で紅熟する。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】枸杞子は、秋熟した果実を採取し日乾したものである。枸杞葉は夏土用の頃本植物の葉を採取乾燥したもの、地骨皮は7～8月頃根を掘り水洗し米のとぎ汁中に1夜浸した後根皮を剝離乾燥したものである。

【成　分】果実はベタイン、ツセアキサンチン等を、果皮はピザリエン等を、葉はルチンを含む。

【効　用】葉及び根皮は解熱、強壮薬として1日約10gを煎用する。果実は、古来有名な強壮、強精薬(健胃薬)として「延寿の妙薬なり、僅かに服用して腹を和げ、精を増すこと神の如し」と言い伝えられ、1日約10gを煎服する。

くさぼけ

〔別名〕じなし

【科　名】ばら科

【生薬名】和木瓜(わもつか)

【薬用部】果　実

【形　態】山野に自生する落葉小灌木で全株に刺がある。葉は有柄、倒卵形宿存性の円い托葉がある。雌雄異株で、早春朱紅色の5弁花を開く。果実は広楕円形の核果で黄熟し、頭部凹み強酸味あり、特異の芳香がある。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】夏秋、果実成熟直前に採取し、2つに割つて風乾する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】有機酸類（リンゴ酸）

【効　用】貧血、脚気、中暑等に1日約5gを煎用する。その他

リンゴ鉄エキスの原料に用う。

【科　名】まめ科
【生薬名】カツコン（葛根）〔局方２部〕
【薬用部】根
【形　態】山野に自生する落葉藤本で、全株に褐色の細毛がある。葉は３枚の復葉で小葉は有柄広楕円形である。
夏から秋にかけて紫赤色の蝶形花を開く。

【産　地】県下各地　特に松本附近
【採取時期及び処理】春より秋にかけて根を掘りとり、水洗後日乾する。板葛根はこれを縦に板状に切つたもので、更にこれを細切したものを方剉葛根という。乾燥歩留は２割である。
【成　分】澱　粉
【効　用】発汗、解熱の要薬として感冒その他熱性諸病に口渇を医し、頭痛を去る。１日量約15g を煎用する。クズ澱粉（局方）の原料

【科　名】まめ科
【生薬名】クジン（苦参）〔局方２部〕
【薬用部】根
【形　態】山野に自生する多年草で高さ約１mである。葉は奇数羽状複葉にして小葉は卵状披針形６～７対よりなる。初夏緑白色の蝶形花を茎の頂に開く。

【産　地】県下各地　特に松筑地方

【採取時期又び処理】秋より冬にかけて根を掘りとり、細根、茎を除き充分水洗して外皮を剝ぎ、直ちに日乾する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】アルカロイド（マトリン）

【効　用】健胃薬として1日1～3gを煎用し、又蛔虫駆除薬としても効力あり。

【科　名】くるみ科

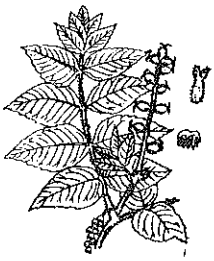
【生薬名】胡桃仁（ことうにん）

【薬用部】種子仁

【形　態】山野に自生又は栽培される落葉喬木で、葉は羽状複葉9～15の小葉からなり、花は淡黄色の単性花で雌雄同株、果実は球形の堅果である。

くるみ

〔別名〕おにぐるみ



【産　地】県下各地　上小地方

【採取時期又び処理】秋、稔熟した果実を採取し、仁を出して乾燥する。

【成　分】脂肪油（胡桃油）蛋白質（ペントサン）

【効　用】滋養強壮、鎮咳の効あり生食する。胡桃油は皮膚病に用いる。

【科　名】くろうめもどき科

【生薬名】ソリシ（鼠李子）〔局方2部〕

【薬用部】果　実

【形　態】山地に自生する落葉灌木で刺がある。葉は有柄倒卵形で細かい鋸歯がある。雌雄異株で初夏に淡黄緑色の小花を開く。果実は球形の核果で熟すると黒く変る。

くろうめもどき

【産　地】松筑地方

【採取時期又び処理】秋、稔熟した果実を採取し、日光で充分乾燥する。薬用に供するには1年以上貯蔵しなければならない。乾燥歩留は8分である。

【成　分】配糖体（ケンフエロール、クリソフアン酸）

【効　用】緩下薬として1回0.2～0.3gを粉末のまま用いる。又は1日5g煎用する。

【科　名】くすのき科

【生薬名】ウショウ（烏樟）

【薬用部】根皮、枝、葉

【形　態】山地に自生する落葉灌木で、樹皮は帯緑黒色葉は有柄、長楕円形で茎葉に芳香がある。花は淡黄色の細小花で春葉腋に開く。

くろもじ

【産　地】県下各地

【採取時期又び処理】8～10月頃（葉は早めに、茎は10月頃まで差支えない）採取し、そのまま乾燥する。茎は箸の太さ以下

のものを薬用に採取する。乾燥歩留は枝葉3割、根皮5割である。

【成　分】精油（リナロール、ゲラニオール、チネオール）

【効　用】根皮は脚気に効あり、煎用する。又樹皮の粉末は切創に止血の効あり。枝葉を蒸溜して精油をとり石鹸の芳香料に用いる。

【科　名】くわ科

【生薬名】ソウハクヒ（桑白皮）〔局方2部〕

【薬用部】根　皮

【形　態】蚕の飼料として広く各地に栽培される。葉に有柄広卵形又は欠刻して種々の葉形を呈す。雌雄異株である。

【産　地】県下各地

【採取時期又び処理】桑の植かえ、又は癈株の時、根を採取し水洗後抱層を剝いて日乾する。枝や細根を混じないように注意する。乾燥歩留は3割である。

【成　分】糖類（ペントーザン、ガラクタン）

【効　用】消炎性利尿兼緩下薬、又は鎮咳薬として1日5～10gを煎用する。

げんのしょうこ

【科　名】ふうろそう科

【生薬名】ゲンノショウコ〔局方2部〕

【薬用部】全　草

【形　態】山地、原野、路傍に自生する多年草にして、茎は地上に匍匐し、全草細毛を密生する。花は白又は紅色で、夏葉間より長花茎を出して開く。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】夏（7～8月）開花時又は開花直前に全草を刈りとり、土砂を落し通風のよい所に吊して陰乾する。葉は緑色を呈するものが良品である。乾燥歩留は2割である。

【成　分】タンニン、有機酸（没食子酸、琥珀酸、プロトカテヒン酸）クエルセチン、有効成分は葉に多く含まれる。

【効　用】止瀉薬、収斂薬、1日7g位を下痢の程度により4～8gを煎用する。胃腸の弱い人の常用に適する。濃い煎汁は切傷、腫物に外用として用いる。

こけもも

【科　名】つつじ科

【生薬名】コケモモ（越橘葉）〔局方2部〕

【薬用部】葉

【形　態】高山に自生する常緑の小灌木で高さ15～20cm、葉は短柄のある倒卵円形又は長楕円形で、革質表面は滑沢、裏面は主脈が隆起する辺緑に鋸歯がある。初夏に梢の頂に帯紅白色の鐘状花を開く。

【産　地】南佐久郡、八ツ岳山麓、浅間山麓

【採取時期及び処理】春及び秋、枝を刈りとり、葉を枝ごと蒸し、葉を折りまげておれる程度まで乾燥する。後ふるいにかけて枝は除く。仕上は緑色を保ち、乾燥充分なものが良品である。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】配糖体（アルブチン）タンニン酸

【効　用】利尿、治淋、防腐薬として1日5～10gを煎用する。

【科　名】もくれん科

【生薬名】辛夷（しんい）

【薬用部】花　蕾

【形　態】山野に自生する落葉喬木で、葉は有柄互生し、倒卵円形である。花は3月頃葉に先立つて白色の6弁花を開く。果実は長楕円形で長さ3～6cm、中に数個の赤い種子がある。

こぶし

〔別名〕やまもくれん

【産　地】県下各地　特に北信地方

【採取時期及び処理】3～4月頃、開花直前の蕾を摘みとり、日陰に吊して乾燥する。乾燥には相当の日時がかかる。

【成　分】精油（チトラール、チネオール、オイゲノール）

【効　用】芳香薬で頭痛、瘡毒等に1日5～10gを煎用する。

【科　名】まめ科

【生薬名】サイカチ（皂莢（そうきょう））〔局方2部〕

【薬用部】莢果、種子、荊

【形　態】野生する落葉喬木で枝及び幹に大形の刺を有す。葉は1～2回偶数羽状複葉で、小葉は卵状楕

さいかち

円形である。花は夏淡黄緑色の蝴蝶花を開く。果実は刀状扁平の莢花である。

【産　地】松筑地方

【採取時期及び処理】秋から冬にかけて果実の充分熟した頃、これを採取し、陽乾する。種を採取するには皂莢を打ち、種子を分離して熱湯にて煮沸したのち充分乾燥する。トゲの乾燥歩留は4割である。

【成　分】サポニン（グレジチヤサポニン）

【効　用】祛痰薬として1日1～2gを煎用する。民間においては浴用或は洗滌料として用いられる。

ざくろ

【科　名】ざくろ科

【生薬名】ザクロ皮（石榴皮）〔局方1部〕

【薬用部】樹皮、根皮、（果実）

【形　態】各地に栽培される落葉喬木で、葉は対生、長楕円形、滑沢鈍頭である。初夏紅朱色の花を開く。果実は球状で、熟せば不規則に割れる。内には紅色、多汁の種子包む。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】7～8月頃根を掘り、水洗後根皮、幹皮、枝皮を別々に剝ぎとり3～4日陽乾する。乾燥歩留は樹皮、根皮5割果実3割である。

【成　分】アルカロイド（ペレチエリン、イソペレチエリン）タンニン約20%

【効　用】絛虫駆除薬として1日30～40gを煎用する。

【科　名】おもだか科

【生薬名】タクシヤ（沢瀉）
〔局方2部〕

【薬用部】根　茎

【形　態】池沼等水辺湿地に自生する多年草である。葉は根生し、大卵形で先端は尖る。花は葉間に花茎を出し、夏3萼、3花弁の小白花を開く。果実は球形瘦果である。

さじおもだか

【産　地】松筑地方

【採取時期及び処理】秋末11月頃、根茎を掘りとり水洗し、鬚根を去り、縦割して日光で乾燥し、白色に仕上げる。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】無機塩類、澱粉、精油

【効　用】利尿薬として旧5～15gを煎用する。

【科　名】ゆり科

【生薬名】土茯苓（山帰来）

【薬用部】根　茎

【形　態】山野に自生する攀縁性灌木で刺があり、結節があつて屈曲している。葉は有柄卵円形で基脚に2個の巻ひげがある、花は帯紅緑色の小花で、夏葉腋より出て開く。果実は赤熟する。

さるとりいばら

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】秋落葉後根茎を掘りとり、ひげ根を除き、水洗後陽乾する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】サポニン、澱粉

【効　用】駆微薬として用いられ、又楊梅瘡毒、瘰歴、胎毒等に用い利尿、止瀉の効あり１日５～10gを煎用する。

【科　名】みづき科

【生薬名】山茱萸（さんしゅゆ）

【薬用部】果　実

【形　態】庭園に栽培される落葉小喬木で高さ約３mに達する。枝は多数分枝し、葉は有柄、対生、長卵円形で、側脈が著しく発達している。花は黄色の小花で、早春葉に先立つて開花する。果実は長楕円形で赤熟し、甘酸味がある。

〔別名〕やまぐみ、さわぐみ

さんしゅゆ

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】果実が暗紅色に熟したとき、採取し、種子を圧出し、果肉のみを日乾する。乾燥歩留は５分である。

【成　分】有機酸類（リンゴ酸、酒石酸）

【効　用】滋養、強壮薬として１日約５g を煎用又は酒に和して服用する。

【科　名】みかん科

【生薬名】サンショウ（山椒）〔局方１部〕

【薬用部】果　皮

【形　態】山野に自生又は栽培される落葉小喬木、葉は奇数羽状複葉で、小葉は卵状披針形、葉柄の基に刺を対生する。花は単性で雌雄異株、春葉液に淡緑色の小花

さんしょう

を開き、球形の蒴果を結ぶ。

【産　地】県下各地　特に長水下伊那地方

【採取時期及び処理】夏、果実が肥大し、完熟せる前（緑色の頃）果穂を摘みとり、日乾し種子を除き果皮のみをとる。乾燥歩留は3割5分である。

【成　分】精油（チトロネラール、ジペンテン、ベタフエランドレン、ゲラニオール）

【効　用】止瀉、蛔虫駆除薬とし、1日5～8gを煎用又は粉末として用いる。芳香薬として一般に用いられる。苦味チンキの原料

しおん

〔別名〕しつじぐさ

【科　名】きく科

【生薬名】紫苑（しおん）

【薬用部】根

【形　態】山野に自生し、多く庭園に栽培される多年草で、高さ2m内外である。葉は長楕円形、大形粗造不斉の鋸歯がある。花は淡紫色の頭状花で、秋多数の小花を出して開く。

【産　地】（栽培）

【採取時期及び処理】夏、根を掘りとり、水洗して日乾する。

【成　分】サポニン

【効　用】鎮咳、祛痰薬として1日約5gを煎用する。

【科　名】せり科

【生薬名】独活（どくかつ）、羌活（きょうかつ）

【薬用部】根（羌活は幼根）

【形　態】山野の湿地に自生する多年草で、茎葉には細毛がある。葉は数回分裂する羽状分裂で、裂片は長楕円形又は卵形である。夏白色5弁の小花を梢上、又は葉腋に開く。

しいうど

【採取時期及び処理】春、新葉2～3枚の頃掘りとり、水洗後副根を除き、茎葉は短かく切り捨て、6cm位に輪切りとして日乾する。老根は独活といい、幼根あるいは外皮をはぎ晒乾したものを羌活という。乾燥歩留は1割6分である。

【成　分】配糖体（アンゲリコトキシン）

【効　用】感冒科、浮腫に1日6～10gを煎用、又は酒に温浸して飲用する。

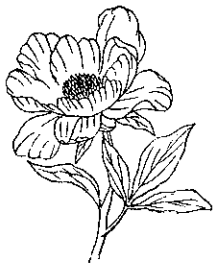
【科　名】きんぽうげ

【生薬名】シヤクヤク（芍薬）〔局方2部〕

【薬用部】根

【形　態】各地に観賞用として栽培される多年草で、高さ1m内外である。葉は2回3出複葉で、小葉は卵形又は披針形である。花は白、赤、紫等の色があり、大形美麗の5弁花で、初夏に茎頂に開く。果実は3～5個よりなる蓇葖を結ぶ。

しやくやく



【産　地】県下各地（栽培）

【採取時期及び処理】8月頃より翌年1月頃までの中で、一般には9月中下旬が最適期（3～6年目の根）である。掘りとつ

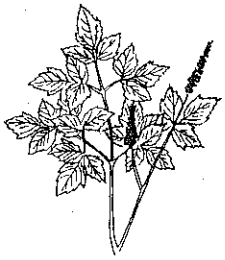
た芍薬はは水洗して土砂を除き、16cm位に切つて外皮をはぎとり、莚にひろげて直ちに日乾する。夜露に当らぬよう夜分室内にとり入れる。熱湯に20分位煮沸して乾燥したものを真芍という。又皮部を除かず乾燥したものを赤芍薬という。乾燥歩留は4割である。

【成　分】アルカロイド（パイオニン）安息香酸

【効　用】鎮痛、鎮痙薬として腹痛、胃痙攣、頭痛等に用いる。又諸種の婦人病に用い、1日3～6gを煎用する。

（しようまには次の2種類のものがあつて共に混同され同一の目的に用いる）

しようま　さらしなしようま



【科　名】きんぽうげ科

【生薬名】ショウマ（升麻、日光升麻、黒升麻）〔局方2部〕

【薬用部】根　茎

【形　態】山地の湿地に自生する多年草である。葉は数回3出複葉で小葉は卵楕円形である。花は白色の小花で雄蕊が多数あり秋茎頂に開く。

【産　地】県下各地　特に長水地方

とりあししようま

【科　名】ゆきのした科

【生薬名】赤升麻

【薬用部】根　茎

【形　態】山地に自生する多年草で結節部は赤味がある。葉は数回分岐する羽状複葉で小葉は卵形で先端が尖り、細鋸歯縁である。花は白色で初夏に茎頂に開く。

【産　地】県下各地　特に上下水内地方

【採取時期又び処理】赤升麻、日光升麻共に10～11月頃、根茎を掘りとり、ひげ根を除いて水洗し、乾燥する。乾燥歩留はさらしなしようま2割、とりあししようま3割5分である。

【成　分】赤升麻は配糖体（アステイルビン）ベルゲニンを含む。日光升麻は成分未詳

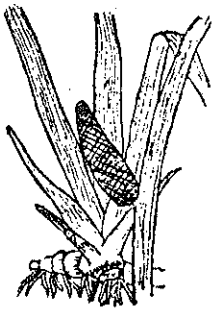
【効　用】共に解毒、解熱薬とし、又神経痛、頭痛、腰痛に1日1～3gを煎用する。なお口中諸病に効あり煎汁にて含嗽する。民間において浴湯料として用いられる。

【科　名】さといも科

【生薬名】菖蒲（しょうぶ）

【薬用部】根　茎

しょうぶ



【形　態】湿地、沼沢に自生する多年草で、葉は叢生し、長剣状で著しい中肋を有する。花は淡黄色の小花で、初夏に葉腋に肉穂花序に開く。果実は長楕円形の漿果で熟すると赤く変る。

【産　地】県下各地　特に東筑摩郡

【採取時期及び処理】秋末、葉が枯れてから根茎を掘りとり、水洗し、ひげ根を除いて水を切り、普通2つに縦割して日乾する。乾燥歩留は1割である。

【成　分】精油（オイゲノール、メチルオイゲノール等）

【効　用】芳香性健胃薬、民間において浴湯料として用いる。

すいかづら

〔別名〕ちちばな

【科　名】すいかづら科

【生薬名】忍冬（にんどう）、金銀花（きんぎんか）

【薬用部】葉、花

【形　態】山野、路傍に自生する常緑蔓性小灌木で、全株に褐色の軟毛がある。葉は対生、長楕円形である。初夏にロート状の先端唇裂する唇形花を開き、白から黄色に変る。花は芳香がある。果実は小球形の漿果で熟すると黒く変る。

【産　地】県下各地　特に上高井郡、東筑摩郡、南佐久郡

【採取時期及び処理】花は4～5月満開時に摘みとつて風乾する。葉は花の採取直後或いは同時に摘みとり日陰で風乾する。乾燥歩留は花2割、葉3割である。

【成　分】葉はタンニン質、含窒素物、花はルテオリン

【効　用】葉、花共に利尿薬として淋疾、膀胱炎、腎臓炎に用いる。葉は忍冬茶としてに茶に代用する。

すずらん

〔別名〕きみかげそう

（有毒）

【科　名】ゆり科

【生薬名】鈴蘭

【薬用部】全　草（特に根及び花）

【形　態】山地に自生する多年草で葉は夏中土の中の地下茎より簇生し、長柄長楕円形である。初夏に白色、鐘状の小花を開く。

【産　地】県下各地　特に上高井、諏訪地方

【採取時期及び処理】5～6月、開花の盛んな頃掘りとり、根部は、水洗し速やかに陰乾する。花は成分が多いから落さぬよ注意する。乾燥歩留は1割5分である。

【成　分】配糖体（コンバラマリン、コンバラトキシン）

【効　用】強心、利尿薬として1日約1.5gを煎用する。

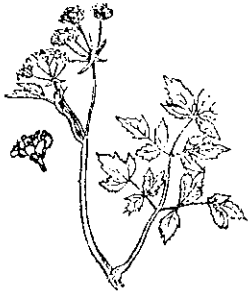
【科　名】せり科

【生薬名】センキユウ（川芎）
〔局方2部〕

【薬用部】根　茎

【形　態】各地に栽培される多年草で高さ40～50cm位、葉は2回3出羽状分裂葉で、葉柄の基部は茎を包む。秋、白色の小花を開く。全草香気がある。

せんきゅう



【産　地】上水内、上下高井地方

【採取時期及び処理】11月、中、下旬、葉の枯れる頃地上部を刈りとり、根茎を傷つけぬように掘りとる。掘りとつたものはひげ根、親球、子球に分け、子球は繁殖用に用いる。ひげ根は水洗後日乾する。親球は水洗後柔軟となるまで乾燥し、沸湯に約10分浸し、又は蒸す。蒸す程度は箸の通る程とし、後莚にひろげ、又は糸を通して乾燥する。乾燥したものは攪拌摩擦して艶出しを行う。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】精油（クニジウムラクトン）

【効　用】鎮痛、鎮痙、鎮静薬として1日約10gを用いる。婦人病にトウキと併用する。

せんぶり

【科　名】りんどう科
【生薬名】センブリ（当薬）〔局方1部〕
【薬用部】全　草
【形　態】山野（やゝ湿地）に自生する多年草で茎は高さ20～25cm の方形で多数に分かれる。葉は対生で、狭披針形、無柄である。花は白色の小花で5深裂し紫色の条線があり、夏、葉腋及び茎頂に開く。全草苦味を有する。
【産　地】上伊那、松筑、南安曇、南佐久、諏訪地方
【採取時期及び処理】10月～11月開花益んな頃根を切らぬよう引きぬき、全草をそのまま薄く拡げて乾燥する。（晴天5～7日を要す）乾燥終れば根の土を十分たたき落す。乾燥歩留は2割5分である。
【成　分】苦味配糖体（スウエルチアマリン）
【効　用】苦味健胃薬として最も一般的なもので、腹痛、下痢又は蛔虫駆除にも効あり。1回0.1～0.5gを煎用する。局方の苦味チンキ健胃散の主要原料。

だいこんそう

【科　名】ばら科
【生薬名】水楊梅（すいようばい）
【薬用部】全草及び地下茎
【形　態】山野の湿地に自生する多年草で高さ1m内外、全株に粗毛がある。葉は大根の葉に似て羽状に深裂した根生葉と、倒卵形の茎葉を生ずる。

夏黄色の5弁花を開き、果実は球形の漿果である。

〔産　地〕県下各地

【採取時期及び処理】秋全草及び地下茎を採取し乾燥する。乾燥歩留は2割、根茎は2割5分。

【成　分】配糖体（ゲイン）

【効　用】利尿薬として1日10gを煎用する。

【科　名】うこぎ科

【生薬名】楤木（たらのき）

【薬用部】根皮、樹皮

【形　態】山野に自生する落葉小喬木で、樹幹葉柄葉脈の上に刺があり、葉は2回奇数羽状複葉で、小葉は広卵円形、鋸牙縁である。花は黄白色の小花で夏期梢上に開く。

たらのき

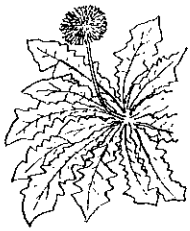
【産　地】県下各地　特に松筑地方、上下伊邦地方

【採取時期及び処理】春又は秋、樹幹及び根を採取し、水洗後5～6cmに切断して皮をはぎとり、日陰で手早く乾燥する。乾燥歩留は根皮、樹皮共に5割である。

【成　分】配糖体（タラリン）有機酸（プロトカテキユ酸）コリン

【効　用】糖尿病のほか、利尿、健胃、収斂の作用あり、1日約8gを煎用する。

たんぽぽ



【科　名】きく科

【生薬名】蒲公英（ほこうえい）

【薬用部】根

【産　地】県下各地の路傍、原野

【採取時期及び処理】春3～4月頃開花前、蕾の出た頃根を切らぬように掘り、根を水洗して日陰に吊して乾燥する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】ステリン様物質、脂肪酸

【効　用】苦味健胃、利尿、解熱、催乳薬として、1日約10gを煎用する。

ちようせんごみし

【科　名】もくれん科

【生薬名】ゴミシ（五味子）〔局方2部〕

【薬用部】果　実

【形　態】山地に自生する落葉藤本で、葉は長柄、倒卵形で、先端尖り、細鋸歯がある。雌雄異株で、夏、紅白色の小花を開き芳香がある。果実は球形の漿果で熟すれば赤く変る。中に2個の種子がある。

【産　地】北佐久郡、上水内郡

【採取時期及び処理】秋成熟した果実を採取し乾燥する。乾燥歩留は1割3分である。

【成　分】粘液質、有機酸

【効　用】滋養、強壮並に収斂性鎮咳薬とする。1日5～15gを煎用する。

つりがねにんじん

〔別名〕つりがねそう

【科　名】ききょう科

【生薬名】沙参（しゃじん）

【薬用部】根

【形　態】山野に自生する多年草で高さ約1mである。葉は輪生又は互生対生で楕円形又は披針形である。秋淡紫色又は白色の鐘状花を茎頂につける。

【産　地】上伊那、松筑地方、上水内郡

【採取時期及び処理】8～9月葉が枯れた頃根を掘りとり、茎は切り落して水洗し、ひげ根を除いて日乾する。乾燥歩留は2割7分である。

【成　分】サポニン

【効　用】祛痰薬として1日5～8gを煎用する。

つるどくだみ

【科　名】たで科

【生薬名】何首烏（かしゅう）

【薬用部】根

【形　態】栽培′往々山野に自生する纏繞性草本で、地下に肥大した外面暗赤褐色の塊状根がある。葉は有柄、互生し心臓形である。花は白色の小花で、夏葉腋に多数開く。果実は「たで」ににた蒴果である。

【採取時期及び処理】秋落葉の前後に晴天続きの日を見て塊根を掘りとり、外皮をいためぬように水洗し、土砂を除き、強い

日光にさらして乾燥する。外面の色により黒赤の2種があり黒何首烏が上品である。乾燥歩留は3割である。

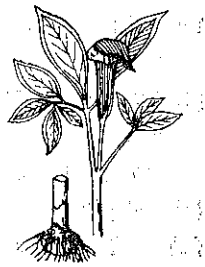
【成　分】配糖体（クリソファン酸）脂肪、レシチン及多量の澱粉

【効　用】強壮強精薬で緩下の作用があり、又滋養薬としても優秀なもので1日10～20gを煎用する。

てんなんしょう

（有毒）

〔別名〕あおまむしぐさ



【科　名】さといも科

【生薬名】天南星（てんなんしょう）

【薬用部】根　茎

【形　態】山野の陰地に自生する多年草で塊状の根茎を有し、茎に暗褐色の斑紋がある。葉は長柄烏足状複葉で、春淡青色又は淡紫色の白線を有する花を開く。

【産　地】上小地方、南佐久郡、戸隠、志賀高原

【採取時期及び処理】晩秋より冬にかけて茎葉の枯死する頃、根茎を掘りとり、根を除き、塊茎を水洗し、竹刀で剝皮後、1cm位の厚さに輪切りとし、充分日乾する。汁が手につくと非常にかゆくなるから注意を要する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】サポニン、澱粉

【効　用】祛痰、鎮痙薬として1日2～5gを煎用する。民間においては根をすりおろし木綿に塗布し、腫物、肩のこり、胸痛に用いる。

【備　考】牧野日本植物図鑑によれば、あをまむしぐさをてんなんしようと誤称していると記載されている。

とうき

【科　名】せり科

【生薬名】トウキ（当帰）〔局方2部〕

【薬用部】根　部

【形　態】山地に自生し、または畑地に栽培される多年草で茎の高さ40～60cmになる。葉は2回3出羽状複葉で、6月頃複繖形花穂を頂生し小白色花を開く、特異の香気がある。

【産　地】北安曇郡白馬村黒菱附近

【採取時期及び処理】11月頃地上部が黄褐色に枯れてきたら掘り、風とおしのよいところに吊して陰乾す。生かわき程度になつたらいつたん下して45～50°c の湯で洗い、軟らかくなつたらもういちど同程度の熱さの湯中に10分間以内漬けてとり出し風とおしの良いところに吊して陰乾する。乾燥歩留2～3割。

【成　分】精油（主成分はブチリデンフタリドその他カルバクロール、セスキテルペン）

【効　用】漢方では鎮静、通経薬に用い、又婦人病の売薬に配伍されている。民間薬としては1日5～10g を煎じてヒスリー月経不順の薬として用う。

【科　名】いね科

【生薬名】南蛮毛（なんばんけ）（玉蜀黎蕊）

【薬用部】とうもろこしの毛（花柱）

【形　態】各地に栽培される1年草で高さ1～2mに達し、円柱状結節がある。葉は40～50cmの広披針形で、花は単性、雌雄同株、雄花は茎の頂上、雌花は腋に大形の穂状花を開く。雌花の花柱は赤褐色を呈する。

とうもろこし

【産　地】松筑地方（栽培）

【採取時期及び処理】種子を食用とした後、癈物とされる花柱（いわゆる毛）を採取して乾燥する。

【成　分】アルコール類（ヒトステロール）糖類（ブドウ糖）

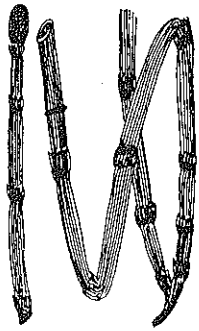
【効　用】利尿薬として腎臓炎、脚気、水腫病、淋疾に1日約8gを煎剤として3回に分服する。

【科　名】とくさ科

【生薬名】木賊（もくぞく）

【薬用部】全　草

【形　態】山野陰地、沼沢等に自生し、又栽植される常緑の多年草である。茎は直立叢生し、中空で結節がある。葉は、鱗状の小葉で各節につき鞘状である。夏秋に茎頂に子嚢穂を生ずる。



とくさ

【産　地】県下各地　特に八ケ岳山

ろく

【採取時期及び処理】6～7月頃、茎を根元より刈りとり、一旦熱湯に浸して日乾する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】無機物（多量の硅酸塩類）

【効　用】収斂、利尿、発汗の効あり、腸出血、痔出血に1日10～20gを煎用する。

【科　名】どくだみ科

【生薬名】ジユウヤク（十薬）〔局方2部〕

【薬用部】全　草

【形　態】原野、庭園の湿地に自生する多年草で、茎は赤紫色を帯び、葉は心臓形である。花は夏花弁様を呈する白色4弁の苞をつけて淡黄色の小花を開く。

どくだみ

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】開花時に根元より刈りとり、風通しのよい日陰に吊して乾燥する。乾燥歩留は1割5分である。

【成　分】精油（メチールノニールケトン）及びフラボノール配糖体（ケルチトリン、イソケルチトリン）無機均類

【効　用】民間において腫物、化膿、創傷、痔に外用として用い、又利尿剤として淋疾、尿道炎に1日約10～15gを煎用する。又茶剤として動脈硬化症の予防薬とされる。

とちばにんじん

【科　名】うこぎ科

【生薬名】チクセツニンジン（竹節人参）〔局方２部〕

【薬用部】根　茎

【形　態】山林中、樹陰地に自生する多年草で、高さ約40cmである。葉は５つの小葉からなり掌状をなす。根茎は竹節様をなし横走する。夏白色の５弁花を茎の頂に開く。果実は小漿果で紅色に熟す。

【産　地】諏訪地方、北安曇地方

【採取時期及び処理】夏、果実が紅色になる頃より茎葉が枯死する頃までの間に根茎を掘りとり、水洗後ひげ根を除き、蒸して直ちに日乾する。乾燥程度は音を立てゝ折れる程とする。根茎は折れ易いから掘りとるときは注意を要する。乾燥歩留は３割５分である。

【成　分】サポニン（パナツクスサポニン）

【効　用】祛痰、解熱、強壮薬として１日約５gを浸剤として用いる。

とりかぶと（有毒）

【科　名】きんぽうげ科

【生薬名】草烏頭（そうう）

【薬用部】塊　根

【形　態】山野に自生する多年草で、茎は膚長で地下に多肉の根がある。葉は互生し、暗紫色で掌状に深裂し歯牙線である。花は紫色で秋茎頂に円錐花序に開く。

【産　地】南安曇郡、松筑地方、西筑摩郡、南北佐久郡

【採取時期及び処理】秋から冬にかけて（9月～翌年3月）塊根を掘りとり、水洗し、塩水に漬けた後日乾する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】アルカロイド（アコニチン、メサコニチン、ヒパコニチン）

【効　用】リウマチ、神経痛に内服1日0.2～0.5g（煎剤）又は煎汁を患部に塗布する。猛毒性の成分を含むので内服には注意を要する。

【科　名】しそ科

【生薬名】香薷（こうじゅ）

【薬用部】全　草（帯花）

【形　態】山野、路傍に自生する1年生である。茎は方形で高さ50～70cm葉は対生、長柄、卵形又は長楕円形で鋸歯がある。花は紫色の小唇形花で、秋開く。全草に特異の香気がある。

なぎなたこうじゅ

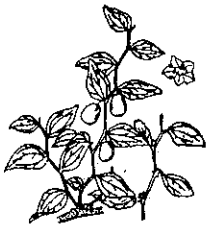
【産　地】西筑摩郡、上小地方、四阿高原

【採取時期及び処理】秋帯花の全草を採取し乾燥する。乾燥歩留は1割5分である。

【成　分】精油（エルシヨルチアケトン、セスキテルペン）

【効　用】解熱及び水腫の利尿に効あり、1日5～15gを煎用する。又調合香料の保留剤に使われる。民間では浴湯料とする。

なつめ



【科　名】くろうめもどき科

【生薬名】タイソウ（大棗）〔局方2部〕

【薬用部】果　実

【形　態】各地に栽培される落葉小喬木で、葉は短柄、卵円形、平滑である。花は淡緑色の小花を開く。果実は長楕円形核果で美紅色に熟する。

【産　地】長水地方、上高井郡、下伊那地方

【採取時期及び処理】10月初旬樹下に莚を敷き、打ち落す。果実は赤色を呈したものは虫が入つたものが多いために黄色のうちに落し、蒸してわずかに変色した処で日乾する。乾燥歩留は3割である。

【成　分】糖分、粘液質、リンゴ酸及び酒石酸塩

【効　用】緩和、利尿、強壮薬として1日3～5gを種子を除いて煎用する。

なるこゆり

【科　名】ゆり科

【生薬名】黄精（おうせい）

【薬用部】根　茎

【形　態】山野に自生する多年草で高さ1m～1.3mである。茎には稜がない。（あまどころとの相異点）葉は狭披針形で互生し、下面に白粉がある。花は淡緑色の小鐘花で初夏に葉腋に2～3個着生する。

【産　地】県下各地　特に松筑地方

【採取時期及び処理】7～8月頃に根茎を掘り、茎葉を除き、水洗して湯どうしした後外皮をはいで縦に割つて日乾する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】粘液質

【効　用】滋養強壮薬（病後等）1日5～10g煎用すること。

なんてん（有毒）

【科　名】めぎ科

【生薬名】南天燭

【薬用部】果　実

【形　態】山地に自生又は庭園に観賞用として栽培される。常緑小灌木である。葉は再三羽状複葉で小葉は卵状披針形、先端は尖つている。花は白色の5弁花で夏の頃開く。果実は球形の小果で白花又は紅色である。

【産　地】下伊那地方、上小地方

【採取時期及び処理】秋白色種の果実を成熟前に採取し充分乾燥する。乾燥歩留は1割3分である。

【成　分】アルカロイド（ドメスチン、ナンテニン）

【効　用】鎮咳薬として百日咳、喘息に1日5～10gを煎用する。

にがき

【科　名】にがき科
【生薬名】ニガキ（苦木）
〔局方2部〕
【薬用部】木　部
【形　態】山野に自生する落葉小喬木である。葉は奇数羽状複葉で小葉は無柄、卵状披針形、鋸歯がある。花は単性、雌雄異株、横緑色の小花で夏開く。核果は広楕円形で熟時黄藍色を呈す。全株は著しい苦味を有する。
【産　地】県下各地
【採取時期及び処理】幹枝の皮部を剝きとり木質のみを乾燥する。乾燥歩留は6割である。
【成　分】苦味質（クワッシイン）タンニン質
【効　用】苦味健胃薬として苦味エキス、苦味チンキの原料とされる。又濃煎汁は農業用殺虫、殺蠅剤として用いられる。1日5～10gを苦味健胃薬として煎用する。

にわとこ（有毒）

【科　名】すいかずら科
【生薬名】接骨木（せつこつぼく）、接骨花（せつこつか）
【薬用部】葉、茎、花
【形　態】山野に自生する落葉灌木である。葉は奇数羽状複葉で、多く針状の托葉があり、小葉は卵状楕円形で鋸歯がある。花は淡黄白色の小花で、早春枝梢に開く。果実は赤い小果を結ぶ。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】花は半開時に採取、日陰で乾燥する。茎葉は採取して陽乾する。乾燥歩留は5割である。

【成　分】未　詳

【効　用】発汗、利尿薬、1日5～10g煎用

【科　名】うるし科

【生薬名】五倍子〔局方2部〕

【薬用部】虫瘿（ゴール）

【形　態】五倍子と云う一種のアブラムシの刺傷により「ヌルデ」の稚芽又は葉柄に生じた嚢状の虫瘿である。「ヌルデ」は各地に自生する落葉喬木で「ウルシ」に似ている。葉は羽状複葉で、小葉は5対内外楕円形、内面に毛があり総葉柄は翅がある。夏、白色の小花が開く。

〔別名〕ふしのき

ぬるで

【産　地】下伊那郡

【採取時期及び処理】秋9～10月頃鎌で五倍子だけ切り取り、熱湯中に入れ虫を殺した後日乾する。乾燥歩留は5割である。

【成　分】タンニン質（タンニン酸50～70%含有）

【効　用】止血収斂薬として局方薬品（五倍子チンキ、タンニン酸）の製造原料となる。

【科　名】ばら科

【生薬名】エイジツ（営実）〔局方２部〕

【薬用部】果実（種子）

【形　態】原野、路傍に自生する落葉小灌木で高さ約１m半である。枝は叢生し刺がある。葉は羽状複葉で小葉は５～７枚、楕円形鋸歯縁である。花は５～６月頃芳香ある白色の５弁花を開く。果実は球形で暗紅色である。

のいばら

【産　地】県下各地　特に北安曇郡、東筑摩郡

【採取時期及び処理】夏末より秋末にかけて美紅色に熟した果実をとり莚を拡げて日乾する。又之を臼で搗き果皮を風選し、種子のみを集めたものを営実仁という。乾燥歩留は３割である。

【成　分】配糖体（ケルセチンラムノグルコシド）

【効　用】利尿、瀉下剤として１日２～５g を煎剤とする。

【科　名】せり科

【生薬名】前胡（ぜんこ）

【薬用部】根

【形　態】山野に自生する多年草で茎の高さ１～1.5m になる。葉は１～２回羽状複葉、小葉は３～５裂し裂片は長楕円形、鋸歯縁、抱状の総葉柄がある。花は紫黒色の小花で秋開く。果実は扁楕円形で翼を有する。

のだけ

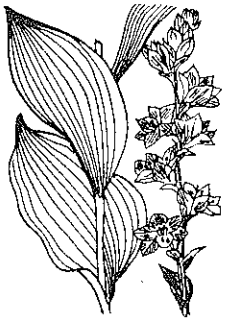
【産　地】東筑摩郡

【採取時期及び処理】10月より冬にかけて根を掘りとり、水洗後充分日乾する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】配糖体（ノダケニン）

【効　用】鎮痛、鎮咳、解熱、祛痰薬として1日約10g を煎用する。

ばいけいそう（有毒）



【科　名】ゆり科

【生薬名】白藜芦根（東雲草）

【薬用部】根　茎

【形　態】高山の湿地に自生する多年草で、高さ約1mである。葉は互生、大形広卵形、鋭尖頭で全縁である。花は初夏に緑白色の小花を開く。近縁種コバイケイソウは全形小さく雄蕊は花被より超出する。

【産　地】北安曇郡、南安曇郡の高山帯

【採取時期及び処理】9～10頃根を掘りとり水洗後日乾する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】アルカロイド（エルビン、ルビエルビン）

【効　用】農業用殺虫剤として根切虫、青虫、葉虫等の駆除に600gに水9ℓを加え煎出し、石ケン80g を加え2～3倍にうすめて用いる。

はこべ

〔別名〕はこべら

【科　名】なでしこ科

【生薬名】繁縷（はんろう）

【薬用部】全　草

【形　態】路傍又は湿地に自生する一年草で茎には一条に並んだ毛茸を有し、葉は対生、上葉有柄下葉無柄の卵円形である。春白色の小花を開く。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】春又は夏全草を採取し乾燥する。乾燥歩留は8分である。

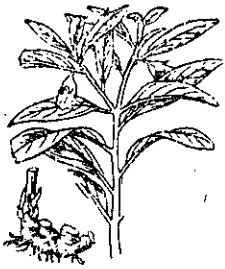
【成　分】未　詳

【効　用】民間において婦人産後の浄血、催乳薬として1日約10gを煎用する。

はしりどころ

ゆきわりそう（有毒）

〔別名〕さわなす



【科　名】なす科

【生薬名】ロート根、ロート葉（莨菪）〔局方1部および2部〕

【薬用部】根、茎、葉

【形　態】山中の陰湿地に群生をなし自生する多年草で、根茎は結節状をなす。茎は高さ30～50cmに至り、分枝疎である。葉は有柄、軟弱、互生、長楕円形で、花は4～5月頃黄紫色の鐘状花を開く。6月頃

地上部は枯死する。

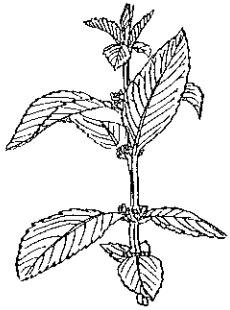
【産　地】県下各地　特に上下伊那郡、諏訪郡、南佐久郡、上下高井郡

【採取時期及び処理】7～8月頃及び春根茎を掘りとり、ひげ根を去り乾燥する。乾燥には相当日数がかかるから適宜に切り、乾燥するがよい。乾燥歩留は2割である。

【成　分】アルカロイド（ヒヨスチアミン、アトロピン、スコポラミン）

【効　用】鎮痛、鎮痙、ロートエキス（局方）の原料

はつか



【科　名】しそ科

【生薬名】はつか（薄荷葉）
〔局方2部〕

【薬用部】葉

【形　態】湿地に自生又は本邦各地に栽培される多年草で、地下に横走する長い地下茎がある。高さ60～90cmで多数の小枝があり全株に細毛がある。葉は有柄長楕円形で鋸歯があり対生する。夏、秋の頃淡紫色の小花を開く。

【産　地】県下各地（栽培）

【採取時期及び処理】収穫適時は春から秋にかけて1～3回収穫できるが一般に秋期下葉が黄緑色になつた頃（なるべく霜のおりる前）に地上部を刈取り20日間ぐらい乾燥する。乾燥ははじめ、さつと日乾し次いで一つかみぐらいに束ね通風のよい日陰を選んで吊乾する。乾燥歩留は2割内外である。

【成　分】精油（メートールを主要分とするハツカ油）

〔効　用〕清涼、芳香、矯味、駆風、健胃、バツカ脳の原料、食料品、香粧に用いる。

ひかげのかずら

【科　名】ひかげのかずら科
【生薬名】石松子〔局方2部〕
【薬用部】胞　子
【形　態】山地に自生する常緑の多年草である。茎は匍匐性で長さ数mに達し、又状に分岐する。葉は小形針状で密生する。夏、枝を斜めに分岐し子嚢穂をつける。
〔産　地〕諏訪地方、上下水内郡上下高井郡、北安曇郡等の山岳地帯
【採取時期及び処理】夏～秋に胞子を採取して乾燥する。
〔成　分〕脂肪油（石松子酸のグリセリード）アルカロイド（リコポジン）微量を含む。
〔効　用〕湿気の吸収を防ぐため丸剤の衣として用い、又皮膚の糜爛部に散布し、乾燥剤とする。

ひがんばな（有毒）

〔別名〕まんじゅしやげ

【科　名】ひがんばな科
【生薬名】石蒜（せきさん）
【薬用部】鱗　茎
【形　態】山野、路傍に自生する多年草で地下に肥えた球形の鱗茎がある。9月下旬に花茎を出し茎頂に多数の紅色の花を開く。

花の後で深緑色線形の葉を生ずる。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】4～6月頃鱗茎を掘りとり、水洗す。澱粉を取る場合は臼でつき、麻袋に入れて水中で澱粉をもみ出す。上澄液を捨て新しい水を入れて澱粉を沈下させる。これを数回くり返して純白とする。乾燥歩留は2割である。アルカロイドを得るためには最初の上澄液に酸性白土を加えて吸着させる。

【成　分】澱粉、アルカロイド（リコリン、セキサノン、セキサニン）

【効　用】澱粉採取、粗製アルカロイドは祛痰薬として用いられるが毒性があるため注意を要す。

ひきおこし

【科　名】しそ科

【生薬名】延命草（えんめいそう）

【薬用部】全　草

【形　態】山野に自生する多年草で、高さ1～1.5mに達し全株に短毛を密生する。葉は対生、卵形で先端尖り、歯牙縁である。秋季頂に淡紫色の唇形花を開く。果実は細小の瘦果である。

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】7月下旬～8月上旬及び10月下旬の2回収穫できる。刈りとりは下葉の黄色く変る前に地上9～15cmぐらいの所より刈りとり拡げて乾燥する。乾燥歩留は1割2分である。

【成　分】苦味質（プレクトランチン、エンメイン）を含む。

【効　用】苦味健胃薬として約2～8gを煎用する。

【科　名】きく科

【生薬名】フキ（和款冬花）

【薬用部】花、根

【形　態】山野の湿地に自生する多年草で、葉は根生、円腎形、不斉歯牙縁である。花は頭状花で雌花は白色、雄花は紫色を呈し初夏葉に先んじて花穂を出す。

ふき

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】初春、未開の花頭を採取し（ふきのとう）乾燥する。根は年中採取できる。根の乾燥歩留は2割である。

【成　分】「ふきのとう」はケルセチン、ケンフエロール、ブドウ糖、果糖、苦味質、精油等を含む。

【効　用】鎮咳、祛痰薬として1日約10gを煎用する。

【科　名】きんぽうげ科

【生薬名】福寿草

【薬用部】全草、根

【形　態】北海道、東北に自生し、又各地に栽培される多年草で、葉は2回羽状複葉、小葉は羽状に深裂する。花は鮮黄色の美花で早春葉と共に開く。瘦果は短小緑色である。

ふくじゅそう（有毒）

【産　地】県下各地に栽培

【採取時期及び処理】初春開花直前に採取し水洗後日乾する。根の乾燥歩留は2割である。

【成　分】強心配糖体（チマリン）
【効　用】強心、利尿薬として1日約2gを浸剤として用いる。

【科　名】なす科
【生薬名】酸漿根（さんしょうこん）
【薬用部】根
【形　態】山地に自生し又は庭園に栽培されている多年草で高さ約1m、葉は互生、長柄卵円形にして不斉鋸歯縁である。初夏白色の小花を開く。漿果は球形にして紅熟し膨大なガク片に包まれる。

ほうずき

【産　地】県下各地　特に更級郡、埴科郡、南北佐久郡
【採取時期及び処理】秋期根を掘りとり水洗して日乾する。乾燥歩留は2割である。
【成　分】苦味質（フィザリン）
【効　用】鎮咳、利尿の効あり1日約10gを煎用する。

【科　名】きんぽうげ科
【生薬名】ボタン（牡丹皮）〔局方2部〕
【薬用部】根の皮部（心部を除いたもの）
【形　態】観賞として各地に栽培される落葉灌木である。葉は2回羽状複葉で、小葉は楕円形、辺縁には不斉の欠刻がある。花は大形で、紅、白、牡丹色等があり初夏梢上に開く。果実は蓇葖を結ぶ。

ぼたん

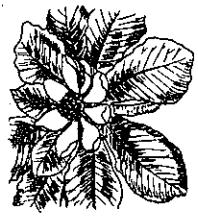
【産　地】県下各地に栽培

【採取時期及び処理】4、5年目以上のものを秋（9月中旬より10月中旬頃まで）に収穫する。掘りとつた根は大小を分け、ひげ根を除き、良く水洗して小根はそのまま日乾し、大根は根の基部を木槌で軽く打つて皮をはぎ、心部と皮を手で持つて引き裂き、皮部のみ10cm位に切つて日乾する。乾燥歩留は3割である。

【成　分】配糖体（ペオノール、フイトステリン）有機酸（安息香酸）

【効　用】鎮痙、鎮痛薬として婦人の諸病月経不順、子宮血の道、腰痛、頭痛等に用いる。1日6gを煎剤として用いる。

ほうのき（有毒）



【科　名】もくれん科

【生薬名】コウボク（厚朴）〔局方2部〕

【薬用部】樹皮、果実

【形　態】山地に自生する落葉喬木で、葉は有柄、倒卵状、長楕円形、長大、下面粉白である。初夏に帯黄白色の花を開き、芳香がある。果実は毬果状の聚果である。

【産　地】県下各地　特に下伊那郡、東筑摩郡、南北安曇郡

【採取時期及び処理】春秋2回採取出来る。樹皮を剝ぎとり、生薑水に1B浸して日乾する。果実は秋季採取して乾燥する。樹皮の乾燥歩留は2割である。

【成　分】アルコール類（マグノロール）精油（マヒロール）マグノクラリン

【効　用】健胃薬として腹痛、嘔吐、下痢を治し、又駆虫にも効がある。1日約5～8gを煎用する。

【科　名】またたび科

【生薬名】木天蓼（もくてんりょう）

【薬用部】果実の虫瘿にかかつたもの

【形　態】山地に自生する蔓性落葉灌木で、葉は有柄、卵形又は楕円形をなし、鋸歯があり梢の葉は、夏期白斑を生ずる。雌雄異株で、初夏に白色の5弁花を葉腋に開く。果実は長楕円形の漿果である。

またたび

【産　地】南安曇郡、南佐久郡、下水内郡

【採取時期及び処理】7～8月頃虫瘿のある果実（無いものも共に）を採取し、熱湯中に5分間位浸した後日乾する、乾燥歩留は2割である。

【成　分】マタタビ酸、精油、その他結晶性物質

【効　用】古来体を温めるに効力があるとされ又麻酔、鎮痛の効ありとして足腰の冷、腹痛、疝痛に1日約10gを粉末として服用する。又猫に対しては万病の薬として有名である。

【科　名】さるのこしかけ科

【生薬名】ブクリヨウ（茯苓）〔局方2部〕

【薬用部】菌　体

【形　態】松の伐採後その根の附近の土中に発生する寄生菌の菌体で不定の球形である。外皮は暗褐色、鱗片状で内部は白又は淡紅色、新鮮なものは一種の臭気がある。

〔別名〕まつふど

まつほど

【産　地】松筑地方

【採取時期及び処理】10月頃より翌年3

月迄が採取適期である。松の伐採後3～10年のものの切株の周囲に土中15cm位の所に発生するから、松の周囲4m位の所から棒の先に30cm位の鉄棒をつけた茯苓突（ホド衝）と称する棒で土中を突きさがす。茯苓のある場合には生餅をついた様な手ごたえを感じ棒の先に白い菌体がついてきて特異の臭を発するから、棒で周囲をさぐり大きさをたしかめて菌体を傷つけぬよう掘りとる。これを一昼夜ほど、水につけて軟かになつたものを黒褐色の外皮をはぎ、縦5cm横4cm厚さ1cm半ぐらいの輪切りとし、日光で乾燥する。乾燥歩留は4割である。

【成　分】多糖類（ベーターパキマン）糖類（果糖、ブドウ糖）

【効　用】利尿薬として水腫、淋疾に効力がある。1日5～8gを煎剤又は粉末として用いる。

【科　名】せり科

【生薬名】サイコ（柴胡）〔局方2部〕

【薬用部】根

【形　態】山野に自生する多年草で高さ約1m葉は互生し、線状披針形でやや粉白である。夏、黄色の小花を開く。

【産　地】県下各地　特に諏訪地方

【採取時期及び処理】初冬茎の枯れる頃根を掘りとり、茎及び細根を除き水洗後日乾する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】サポニン、脂肪油（リノール酸、グリセリド）

【効　用】解熱薬として寒熱を治し、殊にマラリヤに賞用される。1日約3～10gを煎用する。

【科　名】むくろじ科

【生薬名】延命皮（えんめいひ）

【薬用部】種　皮

【形　態】暖地に自生する落葉喬木で葉は偶数羽状複葉、小葉は4～8対あり披針形で鋭尖頭である。6月頃白色又は紫色の小5弁花を開く。果実は2～3に分裂する球形の核果である。

【産　地】下伊那地方

【採取時期及び処理】秋～冬に果実を採取し種を除いて乾燥する。

【成　分】サポニン

【効　用】頭髪、書画、布綿の洗滌料種子は正月の羽根の先の頭に用いられる。

【科　名】むらさき科

【生薬名】シコン（紫根）〔局方2部〕

【薬用部】根

【形　態】山野に自生する多年草で茎の高さ60～90cmである。葉は葉柄を欠き、互生披針形である。茎葉共に毛が多い。花は白色の小ロート状で5裂し、初夏に茎頂又は葉腋に開く。果実は卵円形の小粒の堅果である。

【産　地】県下各地（標高700—1,300m）

【採取時期及び処理】秋期、茎葉が枯死する頂根をとり土砂を落して日乾し、湿気をさけて貯蔵する。乾燥歩留は2割5分である。

【成　分】色素（アセチルシコニン）有機酸類

【効　用】皮フ病薬とされ火傷、痔核等に油類で浸出した液を塗布する。又染料として実用に供する。

めはじき

【科　名】しそ科

【生薬名】益母草（やくもそう）、茺蔚子（じゅうういし）

【薬用部】全草、種子

【形　態】原野で自生する1年草で葉は長柄、羽状に深裂し、裂片は線形である。高さ1～1.5mに達する。夏期淡紫色の唇形花を開く。果実は3稜を有する瘦果である。

【産　地】東筑摩郡

【採取時期及び処理】開花期、全草を刈りとり風乾して5分ぐらいにきざむ。種子は果実が熟した頃採取し、日乾後紙上で叩き種子を集める。全草の乾燥歩留は1割5分である。

【成　分】結晶性物質（レオヌリン）その他脂肪油、脳分を含む。

【効　用】全草は婦人産後の止血補精薬として1日4—6gを煎用し、種子は利尿薬とし、又眼病に煎用する。

【科　名】ばら科

【生薬名】トウニン（挑仁、白挑花）〔局方2部〕

【薬用部】種子、花

【形　態】中国原産で各地に栽培される落葉喬木で、春、白色又は淡紅色5弁花を開く。核果は卵形にして黄熟する。

もも

【産　地】上下伊那、南佐久郡

【採取時期及び処理】挑仁―種子を採取乾燥したもの、白挑花―白花を半開時に採取し乾燥したもの

【成　分】挑仁―配糖体（アミグダリン）エンチーム（エムルジン）白挑花―配糖体（ケンフエロール）

【効　用】挑仁―杏仁の代用として鎮咳、祛痰薬として用いる。白挑花―緩下、利尿薬として1日約4g用いる。

【備　考】白挑花は1年以上経たものは効力が少ない。未開の蕾のみよりなるものは本蕾といい良品である。

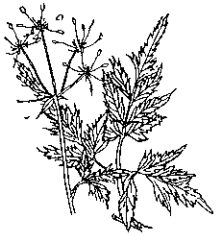
【科　名】せり科

【生薬名】蛇牀子（じゃしょうし）

【薬用部】果　実

【形　態】山野に自生する1年草で全株に粗毛がある。葉は2回羽状の分裂葉で、裂片も羽状に分裂し鋸歯がある。花は複繖形で夏、白色の小花も開く。果実は卵形の小果で小刺がある。

やぶじらみ〔別名〕のにんじん



【産　地】東筑摩郡

【採取時期及び処理】秋季果実をとり日乾する。

【成　分】精油（カジネン、トリレン）脂肪油
【効　用】収飲性消炎薬、強壮薬とし婦人の陰中のかゆみに外用する。漢種蛇牀子の代用である。

【科　名】やまごぼう科
【生薬名】商陸（しょうりく）
【薬用部】根
【形　態】山野に自生し、又栽培されている多年草で茎の高さ1～2m、陰地及び湿地を好む。根は肥大し、葉は互生、有柄、楕円形である。花は初夏白色5弁花を開きガク様をなす。

【産　地】県下各地
【採取時期及び処理】1～2年生の根を掘りとり、水洗後ひげ根を切り、長さ10cmぐらい厚さ2cmぐらいに切り日乾する。乾燥はなるべく早く2～3日で終るようにする。乾燥歩留は3割である。
【成　分】無機物（硝酸カリ）
【効　用】利尿薬として1日約2gを煎用する。

【科　名】きんぽうげ科
【生薬名】烏頭（うず）
【薬用部】塊　根
【形　態】山地に自生する多年草で高さ1m内外葉は互生し、掌状に分裂して光沢がある。花は青紫色又は白色の鶏冠状花で秋

の頃茎頂に開く。

【産　地】東筑摩郡、西筑摩郡

【採取時期及び処理】秋、葉の枯れる頃根を掘りとりひげ根を除き水洗して日乾する。その他塩漬として乾燥、蒸して乾燥したものがあり附子という。乾燥歩留は2割である。

【成　分】アルカロイド（アコニチン、メサコニチン、セバコニチン）

【効　用】解熱、鎮痛、鎮痙薬として用いられるが猛毒であるから注意を要する。

【科　名】やまいも科

【生薬名】山薬（さんやく）

【薬用部】根

【形　態】山野に自生し、又砂地に栽培される多年生蔓草で、地下に長大な塊根がある。葉は対生、有梗、長心臓形で全縁鋭尖頭である。蔓は左巻き雌雄異株で夏、白色の小花を開く。

やまいも

〔別名〕ながいも

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】2～3年生育したものを秋期掘りとり、薯の上部の細い部分を除き、水洗後皮を剝ぎ更に水洗して通風しのよい所に吊し陰乾する。2週間位で乾くから更に2—3日日乾する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】多量の澱粉と粘液質（ムチン）を含む。

【効　用】滋養強壮薬として1日5～10g用いゐ。

【科　名】ゆきのした科

【生薬名】虎耳草（こじそう）

【薬用部】葉

【形　態】山地の湿地に自生又は庭園に栽培される常緑の多年草で全株に細毛がある。葉は長柄、円腎形波縁、上面は緑色、下面は赤色を呈す。複総状花序は頂生初夏、白色不斉5弁花を開き蒴果を結ぶ。

ゆきのした

〔別名〕きじんそう

【産　地】県下各地

【採取時期及び処理】6～7月頃採取し、熱湯に通した後日乾する。乾燥歩留は2割である。

【成　分】無機塩類（硝酸カリ、塩化カリ）

【効　用】切傷、漆かぶれ、小児のヒキツケ、テンカン等に用いる。

【科　名】きく科

【生薬名】艾葉（がいよう）

【薬用部】葉

【形　態】原野、路傍に自生する多年草で茎の高さ1mに至る。葉は有柄互生1～2回羽状に中裂し、裂片は長楕円形で下面に白毛を密生する。花は穂状花序淡褐色の小頭状花で夏秋の頃開く。

よもぎ

〔別名〕もちくさ

【産　地】県下各地

【採取時期】夏、葉の充分発育した時を見て根元より刈り取り風

乾する。乾燥歩留は1割である。

【成　分】精油（チネオール、ツヨーン、セスキテルペン）アデニン、コリン

【効　用】収斂止血、腹痛、吐瀉に効あり、1日約8gを煎用する。又灸点に用いる。「モグサ」の製造原料である。民間においては浴湯料として使用する 。

りんどう

〔別名〕ささりんどう

【科　名】りんどう科

【生薬名】リンドウ（竜胆）
〔局方1部〕

【薬用部】根、根茎

【形　態】山野に自生する多年草で高さ30～60cm 葉は対生、卵状披針形、全縁で先端がとがつている。秋期碧色で先端5裂の鐘状花を開く。果実は紡錘形の果実である。

【産　地】小県郡、東筑摩郡

【採取時期及び処理】秋期10～11月頃根を注意して掘りとり、茎を去り水洗し日乾する。乾燥は晴天4～7日かゝり黄褐色に仕上げる。乾燥歩留は2割である。

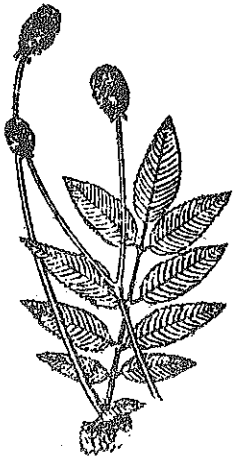
【成　分】苦味配糖体（ゲンチオピクリン）糖類（ゲンチアノーゼ）

【効　用】苦味健胃薬1日2～3gを煎用する。苦味チンキ、健胃散の製造原料

わた

【科　名】あおい科
【生薬名】綿実、草綿
【薬用部】種子、生根
【形　態】各地に栽培される1年草で高さ80cm内外である。葉は有柄3～5裂の掌状葉で、裂片は卵楕円形である秋淡黄色の5弁花を開く。果実は球形の蒴果で熟すれば開裂し白綿を現わす。
【産　地】上高井郡（栽培）
【採取時期及び処理】秋蒴果をとり種子を脱毛後日乾する。
【成　分】脂肪油（パルミチン）
【効　用】種子は催乳薬とし1日5gを、生根は通経薬として1日約2gを煎用する。

われもこう
〔別名〕ぼうずばな



【科　名】ばら科
【生薬名】地榆（もゆ）
【薬用部】根
【形　態】原野に自生する多年草で茎の高さ1.5mに至る。葉は長柄羽状複葉をなし小葉は3～13葉、卵形又は長楕円形、疎鋸歯縁である。夏～秋に茎の頂に暗紫紅色の花を開く。
【産　地】県下各地
【採取時期及び処理】秋期根を掘りとり水洗して茎を切り日乾する。乾燥歩留

は3割5分である。

【成　分】サポニン、タンニン

【効　用】収斂止血薬として吐血、鮳血、喀血、月経過多等に1日5～8gを煎剤として用いる。

生薬名による索引

【あ】

赤升麻……42

【い】

萎蕤……6

一位葉……9

犬山椒……11

いぼた臘……13

茵陳高……25

淫羊藿……7

【う】

ウシヨウ（烏樟）……33

烏頭……74

【え】

エイジツ（営実）……60

延命草……65

延命皮……71

【お】

黄精……56

オウバク（黄柏）……29

オウレン（黄連）……16

オケラ（蒼朮、白朮）……18

【カ】

カイカ（槐花）……15
艾葉……76
柯首烏……49
カツコン（葛根）……31
カロコン（括楼根）……26
カンボウイ（漢防己）……16

【き】

キキョウ（桔梗根）……26
枳殼……23
キササゲ（きささげ実）……27
蓋活……41
キョウニン（杏仁）……7

【く】

枸杞子……29
クジン（苦参）……31

【け】

ケンゴ子（牽牛子）……5
ゲンノショウコ……35

【こ】

香薷……55
コウボク（厚朴）……68
ゴシツ（牛膝）……12

虎耳草……76
虎杖根……8
胡桃仁……31
五倍子……59
牛皮消根……8
ゴミシ……48
小蓮翹……19

【さ】

サイカチ（皂莢）……36
サイコ（柴胡）……70
サイシン（細辛）……14
草烏頭……54
ザクロ皮……37
沙参……49
酸漿根……67
山茱萸……39
サンショウ（山椒）……39
山薬……75
山扁豆……24

【し】

紫苑……40
紫根……71
柿蔕……21

シヤゼンシ（車前子）……17
ジユウヤク（十薬）……53
シヨウマ（升麻、日光升麻、黒升麻）……42
菖蒲……43
商陸……74
辛夷……36

【す】

水楊梅……46
鈴蘭……44

【せ】

石蒜……64
石松子……64
接骨木……58
センキユウ（川芎）……45
前胡……60
センコツ（川骨）……24
センブリ（当薬）……46

【そ】

ソウハクヒ（桑白皮）……34
ソリシ（鼠李子）……33

【た】

タイソウ（大棗）……56
高遠草……3
タクシヤ（沢瀉）……38
楤木……47

【ち】
チクセツニンジン（竹節人蔘）……54
蛇　牀　子……73
地　　榆……78
【て】
天　南　星……50
天　　麻……20
【と】
ト　ウ　キ（当帰）……51
ト　ウ　ニ　ン（桃仁）……73
独　　活……41
土　茯　苓……38
【な】
南　蛮　毛……52
南　天　燭……57
【に】
ニ　ガ　キ（苦木）……58
肉　蓯　蓉……28
忍　　冬（金銀花）……44
【は】
白　頭　翁……18
白　藜　芦　根……61
ハ　ッ　カ（薄荷葉）……63
半　　夏……22
繁　　縷……62

【ひ】
榧実……23
百里香……12
【ふ】
フキ（和歇冬花）……66
福寿草……66
ブクリョウ（茯苓）……69
【ほ】
蒲公英……48
ボタン皮……67
【ま】
万年青……20
【む】
無花果……10
【め】
綿実（草綿）……78
木賊……52
【も】
木天蓼……69
木防己……3
【や】
益母草（充尉子）……72
【よ】
羊蹄……28

【り】
リンドウ……77
【れ】
蓮銭草……21
【ろ】
ロート根（莨菪）……62
鹿蹄草……10
蘆根……5
【わ】
和木瓜……30

《参考文献》

最新和漢薬用植物	刈米達夫 木村雄四郎 著
薬用植物栽培採取法	刈米達夫 若林栄四郎 著
牧野日本植物図鑑改訂版	牧野富太郎 著
生薬学	藤田路 著
植物成分の化学	刈米達夫 著
原色植物大図鑑	村越三千男 著
薬用植物図鑑	森武宗 著
綜合薬用植物	大村重光 著
薬用植物攬要	中沖太七郎 著

……薬草採取等に関するお問合せは下記へ ……

長野市南長野字中下692の2
長野県衛生部薬務課
TEL 0262-32-0111
内線434 435
0262-32-3121